

43341

教科書文庫

4
810
44-1924
20000
26461

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

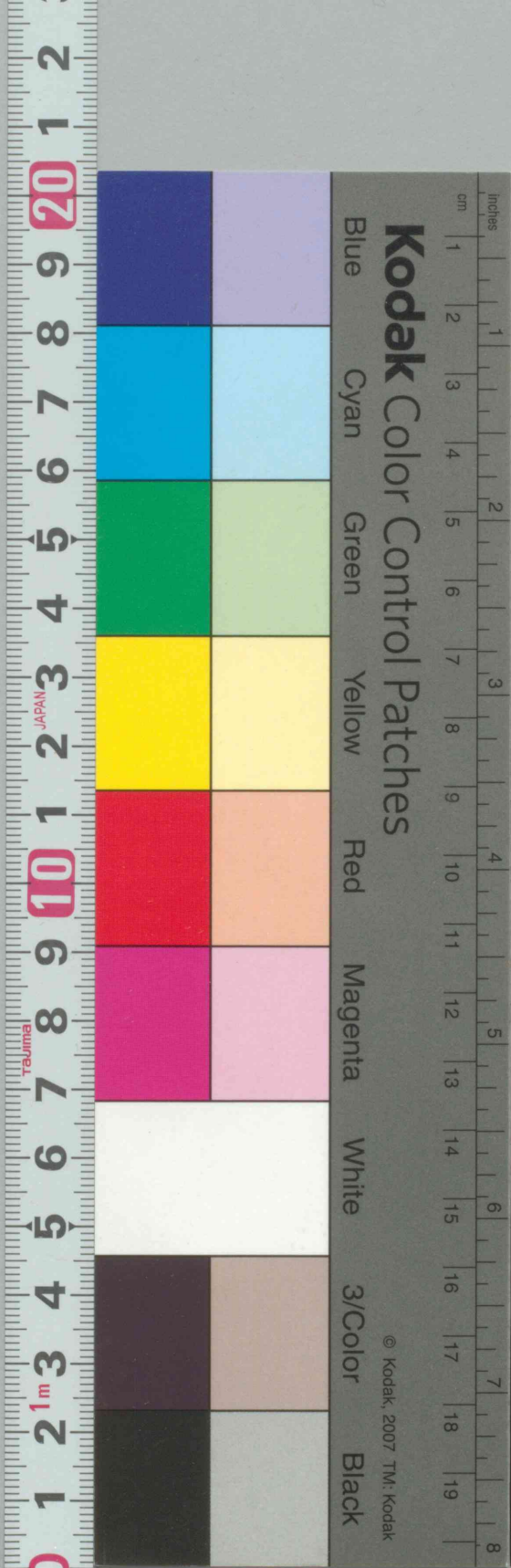


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫  
4  
810  
44-1924  
2000026461

實業補習學校

女子新讀本

後期用

下卷



3759  
shiz

資料室  
中央図書館

教科書文庫  
4  
810  
44-1924  
2000026461

實業補習學校

# 女子新讀本

斯波六郎  
野澤正浩  
共著

後期  
卷用

広島大学図書

2000026461  


広島大学  
教  
26461  
図書

東京 廣陵社藏版

## 勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ  
樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億  
兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國  
體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民  
父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉  
己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ  
智能ヲ啓發シ徳器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ  
開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義  
勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ

如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ  
爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン  
斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民  
ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ  
中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳拳服膺シテ  
咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

## 御名御璽

### 本書編纂の要旨

- 一、本讀本は郡村實業補習學校の女子用國語教科書に充てる目的で編纂したもので  
前期用二冊(尋常小學卒業者及び之と同等の學力あるものに用ひるとして)後期用  
二冊(高等小學卒業者及び之と同等の學力あるものに用ひるとして)とした。
- 一、本書の編纂方針としては、(一)品性の陶冶、(二)趣味性の向上、(三)田園生活の鼓吹、  
(四)讀書力の養成、(五)時代生活の順應等の各方面から考察して、これに適切と思ふ  
教材を選択配列した。殊に女性としての修養方面に關する取材については一段  
の注意を拂つた。
- 一、本書の文體は口語體を主とした。これは時代の趨勢と將來とを考慮した結果で  
ある。併し、過渡期の事であるから文語體も相當に採入れた。書簡文も同様で、候  
體の如きは近い將來に於て絶滅するだらうが、本書では暫くこれを收めて置いた。  
要するに現代を本體として各種の文體を採入れた。また文の種類も普通文は勿

論、和歌俳句新詩等一般に亘つて網羅して置いた。

一、本書は教授時數に比して多量の材料を配當して置いた。これは特に生徒をして自學自習せしめる餘地と便宜を與へたのである。

一、猶、本書には附録として現代使用されて居る新しい言葉及び口語文典の概要をも載せて參考に供して置いた。

大正十三年四月

編者しるす

實業補習學校 女子新讀本 後期用下卷 目次

一 新時代の要求……………	一	一一 米國通信……………	六〇
二 妙人團平……………	九	一二 夕陽の美……………	六五
三 勞働と人生……………	一六	一三 身邊雜事……………	六九
四 愛兒の死……………	一九	一四 病牀六尺……………	七五
五 花賣……………	三四	一五 俳句の感興……………	八六
六 春日局……………	三七	一六 息女への教訓……………	八九
七 父上へ……………	四四	一七 野村望東尼……………	九四
八 平家の都落……………	四九	一八 修養……………	九九
九 平安京……………	五一	一九 木曾の木山……………	一〇五
一〇 妻の眞心……………	五七	二〇 樂地……………	一二

二一 唐卒都婆に血つくる事……………一六六

二二 武藏野の夕……………一二一

二三 女子と文學……………一二六

二四 顯家卿の北の方……………一三四

二五 女子の本分……………一三九

附録 口語法……………一四五



實業補習學校 女子新讀本 後期用下卷

一 新時代の要求

浮田和民

余は新時代の要求と云ふ題を設けて、現代の新しい世の中に生れた男女の務むべき所に就いて述べようと思ふ。今日は昔と時勢が違つて居るから、同じ事業に従事する者でも、古とは多少其の考を異にすべき筈である。すなはち現代には現代の新しい要求がある筈である。世の中は、

昔から今日に至る迄、随分同じ事を繰返して居る。全く違つた仕事をして居るのではなくて、唯仕事の趣が時代々々に由つて違つて居る。

新時代が若い人にも、老人にも、男にも、女にも、貴きにも、賤しきにも、才あるものにも、才なきものにも、總べての人に、第一に要求するものは、働け、死ぬる迄働け。と云ふ事である。

新時代では、或は隴圃に、或は鬪肆に、或は鬻舎に、或は官衙に、或は海外に、天地間何れの所に於ても、働かさへすれば其の要求を満足させる事が出来る。今の世の中に處する人間には、休むと云ふ事は一時の事で、働くこと云ふ事が不斷の務である。而して働く爲に休むは宜しいが休む事を生涯

の目的とする事は、新時代では許さない。

財産を蓄積し、老後公債證書の利息や貯金の利子で生活して往かうと云ふ目的を以てする働は、新時代の要求に應じた働き方ではない。

働くこと云ふ事は、必ずしも今日始まつた事ではない。唯今日のものは、世界的の意味を持つて居る。今日は世界に國を立て、互に競争する必要上、國民舉つて働かねばならぬ義務を有することいふのである。道徳上より云ふと、華族或は分限者と云はるゝ人が貴いのでなくて、總べて働く人は貴い人であること云ふ事になる。

さて働くこと云ふ中には、乞食のやうな働も、盜賊のやうな働

もあるが、新時代の要求する働は眞面目なる働である、眞面目に國家・人類の益をなす様な働である。此の眞面目といふ事が現代の要求の第二である。眞面目といふ事は昔からあつた教であるが、今日の眞面目は從來の正直律義（義理）と云ふばかりの意味ではない、今日は、經濟上の價值と世界的の意味とが加はつて居る。正直の頭に神宿ると云ふやうに、世間の信用が加はると、假令其の人の財産が一萬圓あつても、其の十倍・二十倍の働をさせられる。又正直に儲けて、確實に利息の勘定をもする銀行會社は、益、世間の信用が増して事業が發展する。これは眞面目な經濟上の價值である。又正直な國民であること、世界の市場から資金を吸集する事

も出来る。

日露戦争も日本の金でしたのでない。日本にはあれだけの戦争をする資力は無かつたが、日本國民の正直と愛國心が、英國人其の他の歐羅巴人をして公債募集に應ぜしめたればこそ、露西亞に勝つ事が出来たのである。今後とも、我が國民の世界的信用があれば、資金を得る道は必ずある。歐羅巴には資金が饒多で、金利が廉いから、東洋に出資しようとする傾向はいくらも見える。我が國民に今一層の世界的信用があること、資本は益、殖え國力は愈、進歩すべきであるが、戦争上の信用に比して、實業上の信用の及ばぬのは甚だ遺憾である。軍事上で世界の信用を博した如く、

實業上に信用を得て、世界の資本を吸集するには、世界の信用を博するだけの眞面目と云ふ事が何より肝腎である。

第三には、男ばかり働くといふ事ではいかぬ、女も働けといふ事である。今迄の教育は男のみに重きを置いたが、新時代では、女は第二の國民を育てる重要な責任を有する者として、其の教育は最も重要視せらるゝのである。無學文盲の女の手に育つ兒童は、それだけ智能が後れる。迷信深い女が多いと、男の働を害することになる。今後は女も男同様に教育を受けて、世界的偉人を出す責任を男と分たねばならぬ。社會が女の聰明叡智に待つ所は少くない。徳川家康の母傳通院殿は、家康を生んで後離縁された人で

あるが、遠き慮のあつた賢婦人であつた。ナポレオン第一世の母も偉い婦人で、ナポレオンの意志の強い所は、母の氣質を承けたものといはれてゐる。「我が母は女の肩に男の首を載せて居る。」とナポレオンが稱讚して居る所を見れば、ナポレオンの偉いのは、母の遺傳に因るといふ事がわかる。女を蔑視し、女を無智に置く事は、舊時代の陋習に過ぎぬ。今日世界の人々が、明治維新以來の日本人の中で認めて偉いと思ふて居る人が三人ある。其の一人は東郷元帥である。世界的偉人と認めて尊敬して居る事は、却て日本に於けるよりも甚だしい。是は戦勝の結果から考へるのみでなく、其の戦略に於ても、水も洩らさぬ用心深い所が、元帥



の偉大な所として認識されて居る。日露戦争中、日本に天才の現れたのは、東郷元帥一人である。外人は評してゐる。次ぎは故伊藤公爵である。此の人は政治家として、新日本の創立者として信ぜられて居る。第三には緯度の變化に就いて新發見をせられた木村博士である。世界的に認められた偉人が僅かに此の三人に過ぎぬ。心細い事である。今日は何事も世界を標準として進まねばならぬ。狭隘な思想に囚へられて、眼光島帝國の外に出でぬ小人物は、斷じて新時代の要求する所でない。

妙人團平

義太夫節の三味線彈、壺坂の作曲をなした人。明治三十二年歿。年七十二。

二 妙人團平

和田垣謙三

「御免なさりませ、團平の御師匠さんは此方で。」と、海松布のやうな着物を着た乞食が、或日初代豊澤團平が住居の格子先へ立つた。

「お何や。何方かいらつしやつたやうだ、行つて御覽。」

と、女房は煙管を下に置きながら、長火鉢の前から聲を掛けて、臺所に立働いて居る女中を呼んだ。

「へい、」と、紀州出の女中は、濡れた手を前垂で拭きながら、玄關に出た。さうして、右の手で褌を外しながら敷居際に手をついて、障子を開けて來訪の客を見上げた。

「ちよつこ、その何で御座ります、お師匠様にお目通りを、へいへい。」と、蓬頭垢面の物乞は、揉手をしながら小腰を屈めた。

「あらつ。お前お貰ひぢやないか。おかみさん、お貰ひの癖に旦那さんに……まあごうでせう。」女中は頓狂に叫んだ。

「何です、騒々しい。何うしたと云ふの。」

と、女中の仰山な聲に釣られて女房も出て見た。

「此の様な服装を致しまして、誠にはや何で御座りますが、ごうぞ一生の願ひで御座りますので……へい、お師匠様にちよつこ。」

「そんなことは出来ません。早く往つて下さい。それに何用か知らんが、お師匠様もお留守です。さつさご往つて

下さい。」と女房は面を擧めた。

「そこをごうか一生の願ひで御座りますので。」

と、乞食は執拗く動きさうにもない。

「何だ騒々しい。」

と、主人の團平は襖から身體半分を出して玄關を見た。

「あなた、まあごうでせう。お師匠様にお目にかゝりたいなんて、ほんこに厭なお貰ひですここ。」

と、女房の聲には角があつた。

「なに、お客様か。」

と、團平はやをら玄關口へ出ようとした。

「およしなさい、お貰ひですよ。」

ご、女房は良人の袖を控へた。

「何、ちよつごお目にかゝりさへすれば、もうはや此の世に望みも御座りませんで、へい。」

ご、格子先の聲には濡うるはひがあつた。

「一生の願ひでは、あ。」

ご、團平は溜まらず障子際に出てしまつた。

「へい、一生の願ひで御座りまする。」

團平はつご進んで、その海松布のやうな着物の珍客を見た。さうして慌てたやうに、

「これはようこそ御尊來。さあ、ごうぞ。」

ご、自身で格子をあけて、

「こらつ、何を愚圖々々してゐるんだ。お洗足でも持つて來んか。」

ご、女共を叱つた。そして、今更のやうに恐縮がる乞食を通して無理に上座に据ゑた。女共は唯呆れて物もいひ得なかつた。

「むさい風體で、寔にごうも相濟みませぬ譯で、へい。」

ご、乞食は座に得堪へぬらしくもちぐしてゐる。

「いや、ごう致しまして、して御用は……。」

ご、團平は賓客の禮を崩さなかつた。

「實はその突然の儀に御座りまするが、私は至つて義太夫の三味線を伺ふのが好きで御座りまして、しかし未だその

何で御座りまする、お師匠様のを伺つたここがござりませぬで、それをば一生の願ひごはして居りましても、御覽のやうな、はや見る影もない態まゝで、何ごもごうも……」

「さうですか、それはまあよろしい、弾きませう。さうぞゆつくり聽いて下さい。おい、お茶とお菓子、それからお煙草盆はごうした。いや、ごうも失禮な奴ばかりで。」

「寔にはや有難いことござりまして。」

〔花の上野、響の石碑といふ淨瑠璃。〕

ご、乞食は感に堪へて居る。

調律の撥音はちおとにさへ、浪花の街の動搖は靜まつて、秋の午下ひるまがりは夜半のやうだ。彈出したは、志度寺のお辻の最後。その水際立つた絃の音には、富貴もなく貧賤もなく、人もなく我もなく、三味線もなく撥もなく、唯鳴りに鳴る玄妙の音ばかり、乞食の頬には涙が滂沱と傳はつた。

乞食は欣然として辭し、去つて行く處を知らなかつた。それを飽かずく見送つた團平の目には濡ひがあつた。その妙人の眼の濡ひこそ、知己に遇つた歡喜と、二度と會はれぬ別離の悲しみとを語るものであつた。やがて室に歸つた團平は、藝人の妻としての女房の不心得を責めて、離縁

を申渡したが、同輩門弟等の詫で漸く納まつたといふことである。其の妙人、今は天に歸つて、不思議の音締ねぢりはもう耳にするここが出来ぬ。

あゝ音楽の天才、天才の技倆は人と共に亡びてしまふ。然しこの美はしい譚はなしは永久に生命をもつてあらう。

——吐雲録による——

### 三 労働と人生

綱島 梁川

名は榮一郎、岡山縣の人、倫理學者。明治四十五年歿。

労働は神聖なり、人をして、自己の手腕に立つて獨立の生活を営ましむ。それ労働せずして報酬を得んとするほど、世に奇怪にして不自然なる矛盾はなきが如く、労働して而

して報酬を得るほど自然にして順正なる事相はあらざるなり。働なくして吾等は生存の理由はあらず、吾等は最後の一息まで、何等かの形に於て勞作せざるべからず、勞作せずして報酬を得んとする思想は人類の恥辱なり。それは即ち個人の墮落なり、國家の滅亡なり。我邦今日に於ける投機的精神の盛なるは最も寒心すべし。吾等は働かずんば食はず。といふ覺悟に立たざるべからず。この覺悟、この精神程、人をして剛毅勇敢ならしむるものあらず。或は働いて尙食を得ずといふものあらんか、思ふにかくの如き人は未だ眞に働かざる者、即ち現在の一念を充實せしむる底の勞作を経験せざるもの、言草たるべし。「自然」の組織は、働くも

のに衣食を給せざるほど、さしも不自然に、貧寒に、慳吝ならず。如何なる種類の働にもあれ、働にはそれに伴ふ自然の報償あり。織るものは卷き、耕すものは穫る、あるは人に勞を藉して一定の工賃を得る、亦おのづからなる報酬の一種ならずや。凡そ自家が正直なる額に汗し、清き良心もて獲得せる報酬は、皆以て天與の報酬と稱すべし。(但其の如何なる源より入り來れる報酬が、自家の正直なる汗を汚さざる、良心を満足せしむる底のものなるか、之を決定するの標準如何は、おのづから別論に屬すべし。吾人は他を苦しめ、他を倒して得たるがごとき悪者の財を受けて、わが正直なる勞作を飾る報酬となすごとき能はず。これ吾人も亦、かゝ

る報酬を受くるごことに因りて、間接に他が殺人底の悪行爲に與するものなればなり。吾人の良心は、飽くまでもかゝる報酬を受くるごことを拒絶す。わが清き良心を以て獲たる天與の報酬、げに是こそは公明にして純淨、また一點俗世の薰染を帯びざるなり。此の正直なる勞作ご、此の純潔なる報酬ご、世にこれほど快美底のものあるべしごも思はれず。「中夜の音楽」ごはかゝる快美底の實驗を描きたる言葉なるべし。

#### 四 愛兒の死

西田幾多郎

三十七年の夏、東圃君が家族を携へて歸郷された時、君に

西田幾多郎  
石川縣の人、  
哲學者、文學  
博士、京都帝  
國大學教授。

東圃  
藤岡作太郎、  
石川縣の人、  
國文學者、文  
學博士、故東  
京帝國大學文  
科大學教授。

は愛らしい女の子があつた。昨年夏、君は意外にも小田原の寓居に、此の掌中の珠を喪はれたので、余は前年旅順で戦死した弟のこゝなご引いて、力を盡して君を慰めた。然るに何ぞ圖らん、今年の一月、余は六つになつた次女を喪つて、却て君に慰められる身となつた。

今年の春、或用事の爲に東京に出て、君の家投じた。君と余とは中學以來の親友である。殊に今や同じ悲哀を懷いて、久し振りに相見たのである。いつも逢ふ時のやうな心持ばかりではなかつた。然るに、手紙の上では互に慰め、慰められてゐながら、面と相向うた時は、唯軽く弔辭を交換したばかりであつた。逗留七日、積る話はそれからそれと

盡きなかつたが、遂に一言も亡兒のこゝには及ばなかつた。唯出立の際、君は篋底を探つて一束の草稿を取出して、亡兒の終焉記なれば見てくれよといつて示された。君と余と相逢うて、談亡兒のこゝに及ばなかつたのは、互に其の事を忘れてゐたのではない、又堪へ難い悲哀に觸れ、苦悶を新にするこゝを恐れたのでもない。實は、誠といふものは言語に表し得べきものでなく、言語に表し得べきものは淺薄なものであり、虚偽なものであり、至誠は相見て相言ふ能はざる所に存するからである。我等の相對して相言ふ能はざりし所に、言語はおろか、涙にも表すこゝのできない、深い同情の流が心の底から底へ通うてゐたのである。

我が子を亡くした深い悲哀が、年々共に消えて行くあさましさに、せめて後の思出にも、死んだ子の面影を書き残した。これを直ちに東圃君に送つて一言を求めたことがあつた。當時眞に余の心を知つてくれる人は、君の外にないと思ふたからである。然るに、君は余よりも前に同じ思で同じ事を企てられたのである。余は君の終焉記を行李の底に收めて歸つた。讀んで見て、人の心の誠は斯くまで同じきものか、とつくづく感じた。

回顧すれば、十四歳の頃であつた。余は最も親しかつた姉を喪うて、生來はじめて死別の悲みを知つた。人無き處に至つて思ふまゝに泣いた。稚心に、代られるものならば、

姉に代つて死にたいと心から思つたことを今も記憶してゐる。又三十七年の夏には、悲慘な旅順の戦に、唯一人の弟が敵壘深く屍となつて、其の遺骨を收むることも出来なかつた。此の斷腸の思が未だ全く消え失せないのに、またここに愛兒の一人を喪ふことゝなつたのである。骨肉の情いづれ疎なるはなけれども、特に親子の情は深い。此の度生來未だ曾て知らなかつた沈痛な經驗を得て、余は一々君の心を読む事が出来た。亡き我が子のかはい、こいふには、何の理由もない。たゞ譯もなくかはい、のである。「これまでにして亡くしたのはさぞ惜しかろう。」といつて悔んでくれる人がある。しかしさういふ意味で惜むのでない。



ドストエフ  
スキー

ロシヤの小説  
家  
(1829-1887)

「女の子でよかつた。」とか、「外に子供もあるから。」とかいつてくれる人もある。しかし、さういふことで慰められるものではない。ドストエフスキーが愛兒を喪つた時、又出来るだらう。」といつて慰めた人があつた。すると、氏はこれに答へて、「外の子供ちや仕方がない。私やソニヤが欲しいのだ。」といつたといふことである。

親の愛は純粹である。其の間一毫も利害得失の念を挟む餘地がない。唯亡兒の佛を思ひ出づるにつけて、無限に懐かしく、かはゆく、ごうかして生きてゐてくれ、ばよかつたと思ふ。老いも若きも死ぬのが人生の常だ、死んだのは我が子ばかりではないと思へば、理に於ては少しも悲しむ

アーヴィング  
米國の歴史家  
評論家小説家  
(1783-1859)

べき所はない。しかし人生の常事であつても悲しい事は悲しい、飢渴は人間の自然であつても、飢渴は飢渴であるやうに。「死んだものは何としてでも還らぬから諦めよ、忘れよ」といつてくれる。併し、これは子を喪つた親に取つては堪へ難い苦痛である。時は凡ての傷を癒すといふのは、自然の恵でもあらうが、一方より見れば、それは人間の不人情である。何かかして忘れたくない、何か記念を残してやりたい、せめて我が一生だけは思ひ出してやりたいといふのが、親の誠である。昔、君と机を並べてアーヴィングの「スケッチブック」を讀んだ時、他の心の疵や苦みはこれを忘れ、之を治せんことを欲するが、獨り死別といふ心の疵は、人目を避けても、

これを温め、これを抱かうと思ふ。さういふやうな言葉を讀んだ。今になつて誠に此の言葉が思ひ合はされるのである。折に觸れ、物に感じて思ひ出すが、せめてもの慰藉である。死者に對しての心づくしである。此の悲みは苦痛さういへば誠に苦痛であらう。併し親は此の苦痛の去ることを欲せぬのである。

死にし子  
をんな子

共に紀貫之の  
土佐日記の文  
句

カント  
獨逸の哲學者  
(1724-1804)

「死にし子顔よかりき。」をんな子の爲には親幼くなりぬべし。なご古人も言つたやうに、親の愛はまことに愚痴である。冷靜に外から見たらならば、たわいもない愚痴と思はれるであらう。併し余は今度此の人間の愚痴さういふものの中に、人情の味のあることを悟つた。カントがいつた如く、

物には皆直段がある、獨り人間は直段以上である、目的其の物である。如何に貴重な物でも、それは唯人間の手段として貴重なのである。世の中に人間ほど尊い者はない。物はこれを償ふことが出来るが、如何につまらぬ人間でも、一の靈魂であるからは、他の物を以て償ふことは出来ぬ。而して此の人間の絶對的價值さういふ事が、己が子を喪うたやうな場合に、最も痛切に感ぜられるのである。ゲーテが其の子を喪つ時、*Over the dead* (死者以上)さういつて仕事をつゞけたさういふが、ゲーテにして此の語をなした心の中には、固より仰ぐべき偉大なものがあつたであらう。併し人間の仕事は人情さういふことを離れて外に目的があるのである。

ゲーテ  
獨逸の詩人、  
戯曲家  
(1749-1832)

征馬不<sub>レ</sub>前  
山川草木轉荒  
涼十里風腥新  
戰場征馬不<sub>レ</sub>前  
人不<sub>レ</sub>語金州城  
外立斜陽

い、學問も、事業も、究竟の目的は人情の爲にするのである。而して人情といへば、たゞへ小なりと雖も、親が子を思ふより痛切なものはなからう。徒に高く構へて、自然の美を忘れるものは、却て其の性情の卑しきを示すに過ぎない。「征馬不<sub>レ</sub>前人不<sub>レ</sub>語、金州城外立斜陽」の一詩あつて、愈、乃木將軍の人格が仰がれるのである。

ごにかく余は今度我が子の果敢なき死といふここに由つて、多大の教訓を得た。名利を思うて煩悶絶間なき心の上に一杓の冷水を浴びせかけられたやうな心持がして、一種の涼味を感じると共に、心の奥より秋の日のやうな清く温き光が照して、すべての人の上に純潔な愛を感じること

が出来た。特に深く我が心を動かしたのは、今まで愛らしく話したり、歌つたり、遊んだりしてゐたものが、忽ち此の世から消え失せて壺中の白骨となるといふ事實であつた。若し人生はこれだけのものであるといふならば、人生ほごつまらぬものはない。此處には深い意味がなくてはならぬ、人間の靈的生命はかくも無意義のものではない。死の問題を解決するといふのが、人生の一大事である。死の事實の前には、生は泡沫の如く果敢ないものである。死の問題を解決し得て始めて眞に生の意義を悟ることが出来る。物窮すれば轉ずる。子の死を悲しむ、やる瀬なき親の悲哀悔恨は、自ら人心を轉じて、何等かの慰安の途を求めしめ

オルカニヤ  
イタリヤの畫

る。夏草の上に置ける朝露よりもあはれ果敢なき一生を送つた我が子の身の上を思へば、如何にも斷腸の思がする。併し翻つて考へて見るこ、子の死を悲しむ余も、遠からず同じ運命に服従せねばならぬ。悲しむものも、悲しまれるものも、同じ青山の土塊と化して、唯松風蟲鳴のみ残る。いづれを先、いづれを後とも見分け難いのが、人生の常である。永久なる時の上から考へて見れば何だか滑稽にも見える。生れて何の發展もなさず、何の記憶も残さず、死んだこて悲しんでくれる人だにないと思へば、まことにあはれである。併し如何なる英雄も孩兒も、死に對しては何の意味もない。神の前には凡て同一の靈魂である。オルカニヤの作とい

家でまた彫刻  
家建築家  
(1329-1368)

ひ傳へてゐる畫に、死の神が老若男女、あらゆる種類の人を捕へ來つて、帝王も、乞食も、皆一堆の上に積み重ねてゐるのがある。榮辱得失もこゝに至つては一場の夢に過ぎない。又世の中の幸福といふ點から見ても、生きのびるのが幸であつたらうか、死んだのが幸であつたらうか。生きてゐたならば幸であつたらうかといふのは、親の慾望である。運命の秘密は、我々にはわからない。特に高潔な精神的要求より離れて、單に幸福といふことから考へて見たら、凡て人生はさほご慕ふべきものであるか、ごうか、疑問である。一方より見れば、生れて何等の人世の罪惡にも汚れず、何等の人生の悲哀をも知らず、唯日々嬉戯して、最後に父母の膝を枕

こして死んで行つたと思へば、非常に美しい生涯であつた  
 といふ感じがする。花束を散らしたような詩的な一生で  
 あつたとも思はれる。たゞひ多くの人に記憶され、哀惜さ  
 れずとも懐かしかつた親の心に刻める深い記念、骨にも徹  
 する痛切な悲哀は、寂しい死をも慰め得て餘りあるとも思  
 はれる。

如何なる人も、我が子の死といふここに對しては、種々の  
 迷を起さぬものはなからう。あれをしたならばよかつた、  
 これをしたならばよかつたなど、思うて返らぬことながら徒  
 なる後悔の念に心を悩ますのである。併し、何事も運命と  
 諦めるより他はない。運命は外から働くばかりでなく、内

歎異鈔  
 親鸞の著

からも働く。我々の過失の背後には不可思議の力が支配  
 してゐるやうである。後悔の念の起るのは、自己の力を信  
 じ過ぎるからである。我々はかゝる場合に於て、自己の無  
 力なるを知り、己を棄て、絶大の力に歸依する時、後悔の念  
 は轉じて懺悔の念となり、心は重荷を卸した如くなり、自ら  
 救ひ、又死者に詫びることが出来る。歎異鈔に「念佛はまこ  
 こに淨土に生るゝ種にてやはんべるらん、また地獄に墮つ  
 べき業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり。」  
 といへる尊き信念の面影をも窺ふを得て、無限の新生命に  
 接することが出来る。

— 思索と體驗 —

五 花 賣 り

戸 川 殘 花

戸川殘花  
舊幕臣の家に  
生る、名は安  
宅、文章家。

一

花や、はな。 花をめさずや。 淺茅生の露ふみわけて、賤の女  
が手折りし花ぞ。 花や、はな。 花をめさずや。

二

花はしも世にまじらひて、浮雲の富にけがれず、うたかたこ  
消えてゆくべきはえもなし、ほまれもあらず。

三

春風の愛にしそだち、秋風の義におひたちて、色もあり、香も  
なつかしや。 花は美の命なりけり。

四

露に染め、霞にあらひ、白きあり、紅もあり、かぐはしや、うべ、神  
御衣こ、人みなと言ひにけるかな。

五

貴人も麗しこいひ、平民も清しこたゝへ、見る時のその束の  
まは、罪咎の思もあらず。

六

花や、はな。 花をめさずや。 賣る花は、花賣る人こ、天地の差  
別ありけり。 花や、はな、花や、花、花。

七

草籠に鎌こりそへて、賤の女はあはれなりけり。 霜枯の殘

んの菊か、春雨に散りかふ花か。

八

は、その母もなし、兄もなし、妹もあらず。蝶は追ひ、花は笑へど、わが身には涙なりけり。

九

あな憎や、花をし見れば、天地の御手に抱かれ、白玉の露を口に、霞てふ衣をまこへり。

十

あな憎や、憎やこ、花をいく切れに手折れど、匂ふ姫百合の首うなだれて、争はぬ姿はゆかし。

十一

おぞや、愚か。四季をりくくの花は、みな神の恵みに、色も香も咲きいでしなり。花こそは、人の鑑なりけれ。

——時文軌範——

六 春日局

岸 上 操

かねて期しつる事ながら、昨日まで綾羅錦繡を纏ひし身を、荒袴衣に着更へしのみか、水汲み薪樵る業を助くるは、只一人の老僕のみ。山風寒き埴生の小家に、良人に事へ、子をはく、み、炊ぎ、濯ぎに日を暮しつ、夜は微かなる孤燈の下に、麻紡み絲繰りてふかすも多く、よその見る目は厭はしけれ、更に厭はしげなる氣色もなく、まめしく、はたしき、はたしき勤めて、

質軒と號す、宇都宮の人、史學、漢詩に長ぜり、明治四十年歿す。年四十七。  
良人  
稻葉正成。

只管良人を慰めけるが、生先永き稚兒たちの、賤が子等こ遊  
びつれて、餘念なげなる様を見ては、さすがに優しき母心の、  
「あはれ、由緒ある武士の兒こ生まれながら、一生を花さかぬ  
埋木ごなしおほして、賤山がつ等ご等しなみに朽ちはてさ  
せんこの、いかにも哀しき極みにこそ。」こ、人知れず歎かれ  
て、竊かに手織布子の窄き袂を濕しけんも幾度ぞ。

兄弟  
正勝 正定 正  
利。

稚き兄弟は、以前の榮華をわすれ果て、獵師木樵の子等  
に馴れむつみて、母が苦心を知るよしもなく、日々に野山に  
遊びくらし、見やう見まねに兎追ひ、柴こる業さへまねびつ  
つ、互に伴ごし往きかふ程に、あたりの兒等は、山刀、鋏、鎌の外  
見慣れぬ眼に、貴重なる具足、調度なご見出で、權次、太作の

親々に、歸りてかくご物語れば、物識めきたる老人ごもは、さ  
てこそ彼處の浪人殿は、たしかに京の歴々方が、流されてが  
な來られたに相違あるまい。兄弟の子も、母ぢやの仕付が  
よいやらして、悪戯はしながら、行儀がよいぞ。」こ鼻うごめか  
せば、深い山には猪鹿の種が盡きぬに、瘦せても枯れても、京  
の歴々の果ぢやごならば、金の茶釜の一つ二つはあらうも  
知れぬ。」こ、何心なき里人の風説を、いかにしてか野伏・山賊ご  
もの聞知りたりけん、さらば彼の家には金銀もあるべく、財  
寶も多かるべし。よき隙あらば忍び入りて、我等が榮耀の  
資本にせん。」こ、竊かに語らひつゝ、覘ひ居たりこは、神ならぬ  
身のもごより夢にも知るよしぞなき。主人稻葉正成、ふこ

美濃の人、稻  
葉一鐵の子。



かりそめの感冒の心地して、打臥したるが、思の外に病勢募りて、いごいたう勞れ果てたり。さらでだにかひくしくまめやかなる福女は、良人の病に罹りけるより、日夜帶をも解かでの看病すこしも怠なかりけるが、其の誠心や通じたりけん、今宵は熱も稍低うなりしご覺えて、心地もさまで苦しからず。御身は晝夜手一つの看病に、さこそは疲れ候ひつらめ。暫しが程だにまごろみて、身體を

春 日 局 の 背 像



勞り候へ。ご情ある良人の言葉、むげに否まば、なか／＼に病の爲に悪しかりなんご思ひければ、こゝろよく、さらば暫しが程御免たまはれ。さて、久々にて己が臥床に入りたれど、病める良人が事、稚兒の上、生憎に心にかゝりて、夜は更けぬれご眼も合はず。

をりしもさゆる嵐につれて、遠寺の鐘の聞ゆるを、算ふこともなく數ふれば、草木も眠る丑三つなりけり。傍を見れば、頑是なき稚兒、寐顔に笑を含めるは、如何なる夢路をか辿らん。さて、もかゝる僻陬に人となりなば、いつ成りいづる期かあらんなご、又してもこし方行く末の事なご思ひ出でられて、眼はいよ／＼さえまさり、思はずも太き息のみつか

るゝを、病める良人に悟られじと、強ひて小夜衣引被きて、睡れる様を粧はんとせしめる折しも、枕邊の雨戸ぐわらりと引開けて、忽ちばら／＼と足音させ、はや眼の前に立現はれたる四人の黒き人影は、問はでもしるき曲者なり。餘りの意外に驚きて、跳ねおきたる福女、何者ぞ。と聲かくれば、問はるるまでもなし。夜陰の稼をなす者なり。今宵夜更けて音づれたるも、此の家に蓄へたる金銀財寶のあらん限りを申しうけんこてなれば、命惜しくば、残らず出して我等に捧げよ。否まば、病みほうけたる此の家の主人より血祭せん。と箕子荒らかに踏鳴らして、息まきかゝるに、福女はつゆばかりも慌て騒げる氣色なく、さる儀ならば無用なり。主人の

明智殿

日向守光秀

齊藤利三

美濃の人、明智光秀の甥にして稲葉一鐵の女婿。

紀正恆

豊後の人、後

鳥羽天皇の番

鍛冶新太夫行平の子。

病めるを覗ひて、女を侮り入りこみたる野伏の愚人ども、そも我を誰ごか思へる。明智殿の御内に、鬼と呼ばれし齋藤内藏助利三が息女、今は稲葉佐渡守正成が室ご知らざるこそ愚かなれ。汝等如き盜賊に塵一つだに取らすべきかは無禮の舉動、そこ動くな。といひも終らず、床に懸けたる紀正恆が鍛へに鍛へし業物の大太刀おつこり、矢庭に二人を斬つて捨て、猶も漏さじと斬りたつるに、残れる二人は慌て惑うて、逸足出して逃走るを、福女は追ふて庭にまで出でたりしかど、如法の闇夜に、何方さして逃げうせけん、蹤追ひかけん術なきのみか、病める人の上、稚兒の上、はた、いたくも心にかゝれば、さまではとて取つて返しぬ。このこと誰いふと

春日局

後水尾天皇よ  
り賜はりし名  
なり、寛永二  
十年（二三〇  
三）九月十四  
日歿。年六十  
五。

なく風評ふうはきに上りて、さては心さまの雄々しく賢しきのみにはあらで、武藝また世の人に勝れておはしけり。かへすがへすもいみじき女性よ。こて、人々語り継ぎければ、盜賊ども聞きおちして、その後は隙を窺ふこともあらずなりぬ。

福女ふくめとは誰ぞ。讀む人ははや推せるならん。こはこれ婦女の鑑かたみに世に知られし、徳川三代將軍家光の乳母春日局その人なりけり。

—春日局—

七 父上へ

大谷素子

父上様、私昨日ホテルに安藤正純様を御訪ね致しました。そして三時間お待ちしてやつと御目に懸りました。洋行

なさる方としては餘りに時間の觀念のない方だご少々驚きました。梁瀬やなせ様にも御目に懸りまして御手紙確に御受取り致し、御親切な御手紙に涙ご共に拜見致しました。父上様にも春からの引續きの御繁用にも拘らず、御健康に御過し遊ばすこの事、何よりご御喜び申上げて居ります。

學校は六月二日より御休みにになりましたのでニユーヨークの夕陽莊に御厄介になつて居ります。學校生活は規則に縛られて自由が出来ませんので面白い御話もありませんが、先生も御友達も日本の學校などでは夢にも見る事の出来ないほど、それはく御親切にして下さいます。窮屈な寄宿舎生活の淋しさに日本におこなしくして居つた

らご涙ぐましくなつた事も一度や二度はありましたが、餘りに先生や御友達が親切にして下さるので、今では寧ろこれほど自分の修養になるか、よく解りました。先達御祖父様がお亡くなり遊ばした時も先生が電報を持つて來て下さいまして、何の電報かと御尋ねになりましたので、其の由を申しましたら、これに對して *How* はどうするか、思ふ通りにしてあげる、どうするかに就ては御友達も皆集まつて相談しようぢやないかといつて下さいました。私は大使館に行つて弔電を打ちたいと申しましたら、それなら大使館へ行つてもよろしい。ご許して下さいました。私は大使館に行つて御弔電を打つて歸りましたら *How* は勇氣が

あると譽めて下さいました。さう云ふ風に親身になつて世話して下さいますので、私も規則を守つて一心に勉強致して居ります。御蔭様で今度の卒業式の時に十二人の模範生の中へ加へて頂きました。どうぞお喜び遊ばして頂きましたう存じます。ジャツジも校長先生も譽めて頂きました本當にうれしく存じました。

父上様、日本の着物や帯を御送り遊ばして頂きました有り難う存じます。その上御送金も願ひましてこれ亦有り難く御受け致しました。御蔭様で夏服を一通り奥様に見て頂きました。厚く御禮申上げます。

私はこの夕陽莊に御世話になつて居る間、掃除の御手傳

ひもして居ります。西洋人の子供の番を頼まれてそれも致して居ります。そして人ごいふものはする氣になれば何んでも出来ない事はないといふ事を自覺致しました。今日はこれにて筆ごめます、ごうかくれくも御身御大切に願上げます。

ニューヨーク夕陽莊

にて故郷を偲びつゝ

もご子

御なつかしき

父上様

御前に

「サンデー毎日」より

### 八平家の都落

高山林次郎

凡そ世に傳へ遺されたる歴史は多かれど、平家の都落ばかり、哀れにも、また目覺しきは無かるべし。

南都の餘燼未だ冷めず、墨股の勝鬨尙響きぬるに、信越俄に雲亂れて、木曾の五萬騎はや比叡のあなたに充ち満ちぬ。宇治、淀の備脆くも潰えて、都も今を限りごぞ見えし。あはれ一門の天下身を置くに處なし。世はかく憂きを、み吉野の山のあなたに隱家はなきか。いざさらば己みなん。都の中にていかにもならんよりは、西國のみゆきに、一旦の凌辱を忍ばせ給はんや。生死も知らぬ別路に、人のあはれの

(一) 治承四年十二月、平重衡、父清盛の命を受け、奈良東大寺興福寺を焼く。  
(二) 養和元年三月、重衡等、源行家を尾張國墨股に討ちて之を破る。  
(三) 壽永元年七月、義仲、延暦寺に據る。  
(四) 吉野の山のあなたに宿もがな、身のうき時のかくれ家にせん。古今集、讀人不知。  
(五) 壽永元年七月、平氏義仲を避けて、西海に走る。

(一)ふる里を焼野が原さかへりみて、末も煙の波路をぞ行く。(平家物語、平經盛)

限りもなう、復歸り來べき都さしも思はねばにや、六波羅池殿・西八條以下一門譜第の邸宅宿房京白川の四五萬家を併せて、一炬の煙さなし果てぬるこそ、あわたしかりしか。  
こゝに鳳闕の礎空しく残り、椒房の嵐夜々悲しむ。保元此の方、天下の榮華を盡したる花の都の故郷を、燒野の原に顧て、末は煙の浪路をば、行方も知らずさすらふらん。直衣束帶の身にも、今は黒金の衣を着けたれども、誰かは詠歎の餘哀になれて、弓矢の譽を勵むべき。さても捨て難き命や。今こそはうき世なれ。さすがにしのはるゝ昔の様の、夢に入るをば如何にせん。翠華搖々として西に向へば、秋風いたるごころ野に滿てり。嗚呼、昨日は東關のもごに轡を並

べて十萬餘騎、今日は西海の波に纜を解きて七千餘人。行手の空はわかねども、身にしむ秋はあざむかれず。渚に寄する波の音、袂に宿る月の影、いづれか心を傷ましめざるべき。月の出づる山の端を、あなたの空こやおぼしけん、日暮舳に笛吹く人あり、響はこほく煙波をかすめて、三軍ひこしく耳を欽つ。嗚呼、此の時此の人、想果して如何。

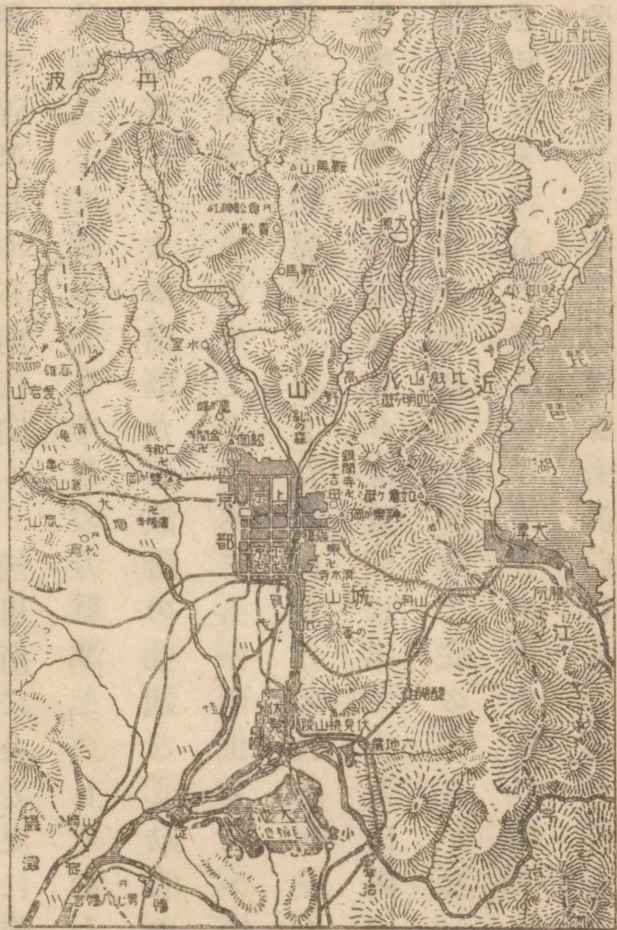
——橋牛全集——

九 平 安 京

藤岡作太郎

日本は世界の樂土なり、東亞の伊太利なり。山川の風景行く所として佳ならざる無きが中に、殊に衆美を聚めたる

を京都とす。京都附近の景は日本の總ての景をエキスにしたるもの。規模の雄大豪壯なるものは存せずといへども、曄麗幽婉の形態は備へざるなし。東に近く比叡如意が嶽より三の峰まで、東山三十六峯笑ふが如く、北には鞍馬貴船氷室鷹が峯、高雄の山々波濤の如く、西にやゝ隔りて愛宕小倉龜山嵐山松尾より山崎に至りて地勢は窮る。松柏の綠色濃き中に、或は目覺むるやうなる櫻の入交るあり、或は紅燃ゆる紅葉を織込みたるあり。一面の草の頂なる四明が嶽、春なほ雪白き比良の遠山などは、わけて朝日夕日に照りはゆる色の千變萬化なるぞ面白き。東の神樂が岡、北の船岡、西の雙が岡は、大和の畝傍香山耳無の如く、近く相並び



てあらね  
ご、子の日  
の遊に小  
松曳く樂  
みなご、い  
づれ劣ら  
ぬごころ  
がら。南  
に稍隔り

て男山之に對し、國家鎮護の八幡宮、宮柱太知りまして、仰ぐもかしこし。

京の東端には賀茂川の流、糺の河合に高野の支流を集めて南に珠を碎き去り、西に桂川、大堰の激湍に清瀧を併せて、琴の音涼しく亦南に向ふ。二川南に合し、更に淀の急流に流れ込みて、沈々として西の方難波をさして走る。

茫洋たる大海、浩蕩たる波濤の壯觀なく、跌宕の觀念を人心に與ふるもの少しといへども、一面よりいへば、山の内に籠りて海を見ざるは、またそれだけの長所なくんばあらず。地勢の勾配や、急なれば、蘆間に出で入る白帆の町の側を往來する眺なきかはりに、濁りて底の明らかならざる河水を知らず。京の水はわけてアルカリ性の鑛物を含めるにや、曝す布をも、人の膚をも眞白にす。海そのものは清けれ

ど、棄てたる塵埃を更に岸に打上ぐるに、藻の臭も添ひ、漁夫など居る所は、わけて見るにも嗅ぐにも心地よからぬこと多し。京都に海なきは惜しむべしといへども、海なくして清き京都は益、清きなり。

山紫水明の語はよく京都の景色をいひあらはせり。何處の山水も、日中よりは朝夕の姿態の面白きは、水蒸氣の然らしむる所なるを知らば、三面を山にして土地濕潤に、水分を含むこと殊に濃なる京都の朝な夕なが、いかに變化に富めるかは、説明を須ひずとも明らかなるべし。嘗て一夏を北陸の海岸に送れる事ありき。一日驟雨の至れるを見る。疾風さど吹き浪俄に高く、黒雲奔りて魔の如く、見るがうち



に重り重りて海を覆ふ。波の音は雲の中にあり、電光閃々、磨る墨の雲間に火花を散す。波か雷か、世界はたゞ一暗黒の中に没し去るか、疑はれて凄じかりき。かくの如き壯絶なる景は、我が數年滯留中、遂に京都にては見るここを得ざりし所なり。されど下京より吉田に通ひたる朝な夕な景色は、今もなほ恍惚として眼前にあるを覺ゆ。引渡す霞に、三條の大橋の擬寶珠の、一つく彼方へく、こ淡くなりて、向ふに寢たる東山は、あるかなきかの夢より未だ覺めやらず。吉田の岡に並び立てる松は、墨繪の刷毛の濃く淡く、花賣る少女の姿は隠れて、聲ぞまづ朝靄を漏來る。時雨の景色のまたよその國には見られぬ様よ。愛宕の峯を覆

ひて白く光りたる薄布の、さては時雨と思ふうちに、はらはらこ面を撲つ。あはや驚きも果てず、雲は走りて直ちに東山を包み、いつしかそれも霽れて、今は山科あたりの山巡りするなるべし。かゝる優しき景色は、山河襟帶の平安京の特色なり。

—國文學全史—

文學博士、和歌  
をよくす。

一〇 妻の真心

佐々木信綱

つぎねふ山背路を、

人づまの馬より行くに、

おの夫の徒歩より行けば、

見るごこに音のみし泣かゆ。

そこもふに、心しいたし。

たらちねの母が形見こ、

わが持たるまそ鏡に、

あきつひれ負ひ並め持ちて、

馬かへ我が夫。

遠くには天の香具山が見え、藤原の宮の藁も霧に籠つた  
秋の朝、籬の下には萩女郎花などが咲亂れて居るわびしい  
田舎家の門を、まづしい旅商人は山城の方へ行くべく、今や  
立出でようとして居る。

送り出たのはうら若い妻で、其の手には古い鏡と、蜻蛉羽  
のやうな薄い領巾を捧げて、夫に渡さうとして居る。

(一)大和國高市郡にある。文武天皇の居。

妻は仲間の商人共が何れも馬で行く遠い旅路に、我が夫  
が乗るべき馬も無くて、いつもの様に歩いて行かうとする  
のを悲しんで、世を去つた母の形見の此の二品を取出し、之  
を金に換へてなりと、馬を買はれよ。」と勧めて居るのである。

夫は妻の心を嬉しいとは思ひながら、

馬買へば妹かちならんよしゑやし

石はふむごも我は二人行かん

と詠んで、それには及ばぬ。馬一匹をよし買ひ得ても、御身  
と俱に行く時には、御身は歩かねばならぬ。よしや石を踏  
んでも、二人で踏まう。」と答へる。

これは、萬葉集十三の巻に出て居る歌である。かの山内

一豊の妻が、鏡匣から黄金を取出して、夫の爲に馬を買はうと言つた話と、千餘年を隔てた好一對の物語である。夫妻の情は此のやうにあらねばならぬと思ふ。——婦人の友——

東京女子高等師範學校教授

一一 米國通信

岡田みつ

(1)Honolulu, 布哇の首府。

日本を出發したのは二月末のここで、天氣のよい日でも寒さは烈しく、大概は船室の中で日を暮しました。二月の二十八日のことでした、今日は東經百八十度を過ぎた。あすも亦二十八日だ。など、船員の話すのを聞きますと、地理で學んだ事を今實地で見るここよと面白く思はれました。三月三日<sup>(1)</sup>ホノル、に着きましたが、それは暖で、我が國の

(2)San Francisco, 米國カリフォルニア州の港。

(3)Union Pacific, イリノイス州の都會。

(4)Rocky, 北米の最高最  
大山脈。

初夏のやうでございました。十日サンフランシスコに着きました。市街、家屋より、人馬の往來まで、萬事目新しいことばかりな中にも、邦人の移住者が多く、國産品で求めて何一つ得られぬものゝないのは、心地よく思はれました。サンフランシスコから東部へ行くには、三條の大陸横斷鐵道<sup>(2)</sup>があります、ユニオン・パシフィック線を取り、十一日黄昏シカゴに向つて出發しました。ここは汽車が渡船に乗つて對岸に行くのだ。ご人の説明を聞きましたが、外は暗くつても見えなかつたのは残念でございました。シカゴまで四日の路は、たゞ<sup>(3)</sup>ロッキーマン山の大高原を通過するだけのことで、窓より見るものは、禿山か荒野か、さもなければ

(1) New York.  
同名の州の都  
會。米國最大  
の市。

(2) Boston.  
マサチューセツ  
ツ州の首府。  
文學の淵藪と  
稱せらる。

(3) Wellesley.

雲雪ばかりで、小さく整つた我が國の山水の美さは比べものにはなりません。その中に自ら雄大莊嚴の觀はあるやうに思はれました。シカゴには下車せず、直ちにニューヨークに着きました。二十層三十層の大厦は連峰のやうに立並び、高架鐵道線は其の上を虹のやうに走つて、道行く人は足を空にして、物狂はしく走りまはつて居ります。こゝを辭してボストンに着いたのは二十日でした。ニューヨークのたゞせはしく、めまぐるしいのは違つて、こゝは歴史にも富み、閑雅な都會でございました。それからやがて目的地たるウェルズレーの里に到着致しました。ウェルズレーはボストンを距ること十五哩の

(1) 一八七五年  
の創立。

田舎で、樹木多く、家屋少く、幽靜な學郷です。女子大學はこの里の大部分を占め、構内には山あり、野あり、湖水あり、天文臺、禮拜堂など、其の間を點綴して居ります。この學校に入つて第一に驚いたのは、婦人が有力なる位置を占めてゐることでした。學校長、副校長は固より、大概の教師は皆婦人です。いづれも立派な學位をもち、確かな學識をもつて、學校の爲に盡力して居られます。生徒は千人に近く、いづれも眞面目に、而も快活に、よく學問を勉強し、又能く遊戯、娛樂に力を用ひて居ります。大抵教師の指圖を待たず、勝手に學び、勝手に遊ぶといふ風でございす。

「學校に在るはたゞ知識を得るのみならず、立派なる人とならんが爲なり。」といふのは、この人の言行にも顯れて居り、机にばかり倚りかゝつた人は尊ばれず、見聞博く、識見に富み、交際に巧に、同情に富んでゐる人が持てはやされます。無邪氣で活潑な一年生に對照して、四年生の落附いて品位のあるのは、四年間の學校生活の致す所と、たのもしく存せられます。身にしみて嬉しいのは、生徒の深切なことです。それは學科のことはもとより、其の他何くれと世話をしてくれません。「何かお困りのことはありませんか。」と尋ね、散歩においでになりませんか。」と誘ふ。その同情は溢れるばかりです。同情の溢れる所を其のまゝに顯して、無用の遠慮

氣兼に心を痛めるなどいふ風は少しも見えません。外人が我が國に來た折、私達はかほどの親切を盡すことができません。どうか、心竊かに愧入りました。

申し上げたい事は澤山ございますが、今は五時半で、夕食の卓テイルに就く前、髪を整へ、衣服を清くして出る習慣ですから、これからその用意に掛りますので、これで筆を止めておきます。もし私の事をおたづねになる方々がございましたら、無事に勉學して居るご御傳へ下さいまし。さやうなら。

## 一二 夕陽の美

高山林次郎

夕陽の美は、西洋ではあらゆる美中の最も美なるものゝ

山形縣の人。  
文學者で、明治三十五年十二月歿す。

一つとして數へられて居る。それで苟も自然の美に興味を有てる詩人は、皆口を極めてその美を歎美して居る。ベインの様な學者ですら、其の心理學書で、美しき者の例に夕陽と星と百合の花との三つを擧げて居る。我が國の文學にも、夕日影とか、夕照とかいふ文字は見えて居るが、其の崇大なる光景を想はしむるに足る一首一篇だにないのは、いさゝか不満足之感がある。

夕陽は美はしいが、其の中でも、海の夕陽ほど美はしいものはあるまい。自分は奥州の西海岸に育つたものであるから、海の日没の景色は、自分には牢乎たる印象を留めて居る。あの夕の雲のいろ／＼のたゞすまひ、それにはえうつ

れる夕陽の光の濃き淡き、それに伴なうて、大海原のいろいろに彩られたる、これ等の一切が、日の傾くにつれて形も色もそれぞれ變り行く有様、殊に大空の色の暮れゆく具合などは、繪にも、筆にも、あらはし盡くし難い。

海の夕陽に對して自分の起す感情は、常に「平和」である。譬へば世界のあらゆる障礙に打勝ちたる大勇者が、今方に其の最後の戰鬥を後にして、榮光と平和とに擁せられつゝ、靜かに其の墓門に凱旋するといふ様な趣がある。夕陽のけしきは如何にも崇大光明ではあるが、其の全體の上に、何處もなく疲れ憊れたる老衰の趣がある事は、自分には如何しても争はれない感情である。之を譬へば、朝日の景色の、

よろづ活きく、こして、今將に戰場に上らんとする初陣の勇士の概あるに較ぶれば、兩々相對して、さながら人生の兩極端を現示して居る趣があるではないか。

あゝ、人や、その青年は朝日の如く、その晩年は夕陽の如くありたいものではないか。争を経ざる平和は、平和たるの價は無い。吾等は一生の戦闘に打勝ち、榮光の雲につまられて、靜かに西方の天に入りたいものではないか。あゝ、海の夕陽は美はしいが、海の夕陽に似たる人生の末路は、更に美はしからうではないか。

阿部次郎

哲學者  
東北大學教授

### 一三 身邊雜事

阿部次郎

他人の長所を認めて、これを尊重し、勉り、助成することは、雜り氣のない朗かな歡である。併し不幸にして我等が眼を開いて他に對するこき、我等の瞳にその影を落すものは他人の長所や美點ばかりではない。その弱點や短所も亦否應なしにその黑影を印象する場合がある。その時この餘儀ない印象を如何に取扱ふべきか。この問題が自分にこつては一苦勞である。

その缺點が甚だしく重大な、致命的なものでない限、これをむきになつて憤慨したり、これを自分に加へられたる傷

害として不愉快がつたりする心持からは、自分は可なり遠ざかつてゐる。この弱點を捕へて、それを玩具にして、調戲つたり、くすぐつたりする悪戯氣も、近頃は随分少くなつて來た。自分は相手の弱點を自分一人の腹で吞込んで、黙つて之を看過して了ふか、若くは好意ある微笑を以て、相手はその弱點を始末して行く自然の經過を見護つてゐるか、ここが出来るやうに思ふ。さうして必要に應じて適度の忠告と暗示とを與へて行くここが出来るやうに思ふ。相手の長所を重んじて、これを助成して行くここに中心の態度を置くかぎり、多少の缺點を寛容することは、そんなに困難なところではない。

併し自分は自分の友人に、彼は俺の缺點を吞込んで知らん顔をしてゐるといふ印象を與へることを恐れる。自分は無意識の間に、自分が相手の弱點を脅す態度をこつてゐることを恐れる。その人に十分の信賴を寄せてゐる場合でないかぎり、他人から吞込まれてゐると思ふことは、決して心持のいゝものではない。自分は他人から十分に信賴される資格を自分に許すここが出来ないから、自分が相手の缺點を看過して黙つてゐるここが、却て相手に不安の念を與へることを恐れるのである。若しN先生のやうに、相手の弱點に對する不同意を即座に即刻に發表して、而も少しも相互の親愛を傷つけずに行くここが出来たら、自分は



どんなにせいせいするころであらう。併し現在のころ自分にはそれが出来ない。自分は相手の缺點を感じながら、或時が来るまではこれを自分の腹の中に藏つて置く。さうして或特別に静かな時を擇んで、出来るだけ和かな言葉をして相手に忠告する。現在の自分にはこれ以上のことは徳が足りなくて企て及ばないのである。凡そ言へないことがあると云ふことは、人と人との間に在つて決して喜ばしいことではない。然るに自分には時として相手に言へない心持がある。若しこの沈黙が善良な意志から出ていることを信じ得なかつたら、自分は嘸氣詰りな人に見えるころであらう。唯自分の善良な意志を信ずることが

出来る人のみ自分の友達となり得るのである。

さうして更に悪いことは、自分の軽々に看過したつもりである缺點が、その實自分の心の底に引掛つて、相手に對する輕蔑若くは怒を構成してある場合があるころである。自分は時として意識的にその人の長所を見ながら——若しくは見ようとするが、無意識の間に、その人を輕蔑してあることを發見する。この矛盾を發見するころは自分にとつて特に苦い經驗である。

この間Xが来てYの書いたもの、話をしたとき——Yの書いたもの、不合理を指摘してこれを笑つたとき、自分はごうにかしてYを辯護しようとした。一見明かに不合

理なYの言葉をどうにかして助るやうに解釋してやらうとした。併し悪いことにはXの話をきいたとき自分も高き笑つたさうだ。而も猶悪いことには、自分は自分が高き笑つたここにまるで氣が附かずにゐた。自分は言葉でYを辯護して、心でYを笑つたに相違ないのである。氣取らうとして益、柝を踏外すYの態度を笑つたに相違ないのである。

固よりYを辯護した自分の言葉が虚偽の言葉でないことは、誰よりも自分自身が最もよくこれを知つてゐる。併しそれは如何にも底の浅い言葉である。輕蔑と肩を並べた好意、痛罵にも劣れる好意を、Yが喜び得ないのは固より

當然である。自分はこのやうな好意がYと自分との間に好意として通用し得ないことを熟知してゐる。自分はそれが好意として通用し得る日が来るまで、沈黙して之をしまつて置かなければならない。さうして努めて彼を痛罵する方の一面にエンファシスを置かなければならない。痛罵の段階を経なければ、自分の彼に對する好意は何時までも生きて來ないであらう。

——三太郎日記——

### 一四 病牀六尺

正岡子規

病牀に寝て身動きの出来る間は敢へて病氣を辛いと思はず、平氣で寢轉んで居つたが、此の頃のやうに、身動きが

正岡子規  
名は常規  
伊豫の人  
俳人・歌人  
新聞記者  
明治三十五年歿  
年三十六



教家はいふであらう。併し宗教を信ぜぬ予には宗教も何の役にも立たない。基督教を信ぜぬ者には神の救の手は届かない。佛教を信ぜぬ者は南無阿彌陀佛を繰返して日を暮すことも出来ない。或は畫本を見て苦痛をまぎらかしたこともある。併し如何に面白い畫本でも毎日々々同じ物を繰返して見たのでは、十日もたぬうちに最早陳腐になつて再び苦痛をまぎらかす種にもならない。或は雙眼寫眞を弄んで日を暮したこともある。それも毎日見れば段々に面白みが減じて、後に頭の痛む時など却て頭を痛める料になる。

何よりも嬉しきは親切な友達の看護してくれるところで

ある。がそれも屢、出逢つては別に新しい話もないので、病人も看護人も兩方が差向つて一はたゞ苦しみ、一は其の苦みを見て心に苦しむやうになる。去年頃までは唯一の樂みとして居つた飲食の慾も、今は殆ど消え去つたのみならず、飲食其の物が却て身體を煩はして、それがために晝夜もがき苦しむことは、近來珍しからぬ事實となつて來た。或は謠を聞き或は義太夫を聞いて楽しんだのは去年のことであつたが、今は軍談師を呼んで來ようか、活動寫眞をやらして見ようかとの、友達の親切な慰めは、却て聞くさへも頭を痛めるやうになつた。大勢の人を集めて、これと室を共にすることも苦みの種である。謠の聲、三味線の音、遙かの

遠音を聞けばこそ面白けれ、枕元近くでは其の音が頭に響き、甚だしきは我が呼吸さへ他の呼吸に支配せられて、非常に苦痛を感じる様になつて仕舞つた。畢竟自分と自分の周囲と調和するところが甚だ困難になつて來たのである。麻痺劑の十分に功を奏した時は、此の調和が稍容易であるが、今は麻痺劑が十分に効を奏することが出来なくなつた。予は實にかやうな境界に陥つて居るのである。いつ見ても同じ病苦談、聞く人には馬鹿々々しくうるさいであらうが、苦しいといふより外に仕方もない凡夫の病苦談。「如何に日を暮すべきか。」誰かこの苦を救つてくれる者はあるまいか。情ある人我病牀に來て予に珍しき話など聞かさんこ

ならば、謹んで予は爲に多少の苦を救はれることを謝するであらう。予に珍しき話とは必ずしも俳句談にあらず、文學談にあらず、宗教、美術、理化、農藝、百般の話は知識なき予に取つて悉く興味を感じぬものはない。たゞ斷つて置くのは、差向つて坐りながら何も話のない人である。(二十一日)今朝起きるご一封の手紙を受取つた。それは本郷の某氏ごいふ、余の知らぬ人より來たのである。其の手紙は大略左の通りである。

拜啓。昨日貴君の病牀六尺を讀み感ずる所あり。左の數言を呈し候。

第一、かゝる場合には天帝又は如來ご共にあることを信

じて安んずべし。  
第二、もし右を信ずること能はずならば、人力の及ばざるところを悟りてたゞ現状に安んぜよ。現状の進行に任せよ。痛みをして痛ましめよ。大法のなすがまゝに任せよ。天地萬物わが前に出沒隠見するに任せよ。第三、もし右二者共に能はずならば、涕泣せよ、煩悶せよ、困頓せよ、而して死に至らんのみ。  
小生は嘗て瀕死の境にあり、肉體の煩悶困頓を免れざりしも、右第二の工夫によりて精神の安靜を得たり。これ小生の宗教的救濟なりき。知らず、貴君の苦痛を救濟し得るや否やを。敢へて請ふ、病間あらば一考あれ。(下略)

此の親切な且明瞭平易な手紙は甚だ余の心を獲たものであつて、余の考も殆ど此の手紙の中に盡きて居る。唯余に在つては精神の煩悶といふのも、生死出離の大問題ではない。病氣が身體を衰弱せしめた爲であるか、脊髓系を侵されて居る爲であるか、とにかく生理的に精神の煩悶を來すのであつて、苦しい時には、何とも彼とも致し様の無い譯である。しかし生理的に煩悶することも、其の煩悶を免れる手段は固より「現状の進行に任せよ」より外は無いのである。號泣し煩悶して死に至るより外に仕方が無いのである。たゞへ他人の苦が八分で自分の苦が十分であるとしても、他人も自分も一樣に諦めるこいふより外に諦め方は

ない。此の十分の苦が更に進んで十二分の苦痛を受ける様になつたとしても、やはり諦めるより外はないのである。けれどもそれが肉體の苦である上は、程度の軽い時はたこへ諦めることが出来ないでも、慰める手段がない事もない。程度の進んだ苦に至つては、啻に慰めることの出来ないのみならず、諦めて居つても尙諦めがつかぬやうな氣がする。蓋しそれはやはり諦めのつかぬのであらう。笑へ。笑へ。健康な人は笑へ。病氣を知らぬ人は笑へ。幸福な人は笑へ。達者な兩脚を持ちながら車に乗るやうな人は笑へ。自分の後ろから巡查のついて來るのを知らず路に落ちてゐる財布をくすねんとするやうな人は笑へ。年が年中、晝

も夜も寢床に横たはつて、三尺の盆栽さへ常に目よりも上に見上げて楽しんで居るやうな自分ですら、痲痺劑のお蔭で多少の苦痛を減じて居る時は、煩悶して居つた時の自分を笑つてやりたくなる。實に病人は愚なものである。これは余自身が愚なばかりでなく、一般人間の通有性である。笑ふ時の余も、笑はれる時の余も同一の人間である。こいふ事を知つたならば、余が煩悶を笑ふ所の人も、一朝地を換へれば、皆余に笑はれるの人たるを免れないだらう。咄々大笑。(廿三日)

——子規隨筆——

一五 俳句の感興

發句は形短けれど餘情ありて玩味すべきもの多かり。

早少女や泣く子の方へ植ゑて行く

わかれても闇に見にくる幟かな

此の句ごもを吟ずれば親の子を思ふ情思ひやらる。

遠江國天龍川の邊に老いたる賤の男孫を失ひて其の翌

年の七月孟蘭盆さいふに彼の孫が位牌に供ふごとて、

去年まで叱つた瓜を手向かな

此の句を吟ずれば恩愛の情涙も落つるばかりなり。

其角は、

夕立や田をみめぐりの神ならば

にて雨をふらし不角は

頼政がひろひ残ししひもがな

にて位にすゝめり。其の道の蘊奥に至りては、歌も句も人

情を和ぐるごころ格別の相違あるべからず。

去りし年、總州邊にて俳諧を好む獨者の方へ盜賊入りて、

器財悉く盗み取れり。彼の俳人を手厳しく柱にくゝり附

けて、ちつとも動かせず。俳人のいふやう、我少しの望あり。

今かくの有様になれば、金錢財寶一つとして惜しからず。

しかし一つの願あり、笈の中に入置きたる宗祇自筆の伊勢

物語と、床の間に置きたる末の松山の文臺を我に與へ給

(一)姓は立羽。江戶の俳人。寶曆三年(二四一三)歿。年六十二。

(一)連の名家。紀伊の人。文龜二年(二二六二)函根湯本に没。年八十二。



へ。いひければ、賊魁聞届けて、さもあらけなく取出して投げやり、俳人の繩目をゆるして、盜賊ごもは出行きけるが、さるにても、只今彼が乞ひたる書物と文臺とは結構なるものにや、立歸りて奪ひ取らんさて、戸外に佇みて内の様子を伺ひけるに、俳人は屈する色も無く、燈かきたて、筆と紙とを手に持ちながら、

ぬす人もあごごさし行く夜寒かな

と繰返し、獨り吟じおけるに、盜賊等此の句にめで、大いに感じ、今宵奪ひ取りたる道具ごもを悉く返し與へ、かゝる無慾なる面白き人ごは知らず狼藉したりさて、金を多く與へけるを、敢へて取るごごなかりしが、四五日も立ちて、い

（一）今古和歌集  
の序、力をも  
入れずして天  
地を動かして、  
目に見えぬ鬼  
神をあはれと  
思はせ、男女  
の中をも和  
げ、猛き武士  
の心をも慰む  
るは歌なり云

づくよりごもなく、樽肴に熨斗包添へて、竈の前に置きて歸りけり。察するごころ彼の盜賊等の業なるべし。

實に其の道に至りては、鬼神をも感ぜしめ、猛き武士の心をも慰め、男女の中をも和ぐ。僅かの一端いひながら、其の感應深く思ふべし。

——雨窓閑話——

### 一六 息女への教訓

烏丸光廣

一筆申し參らせ候。然れば、そもじ幾千代の色のかはらぬ常磐木の枝を連ぬる御祝として、よそへ越し給ふべきご、誠にめでたう覚え參らせ候。申すまでは候はねごも、身持優しく、心おごなし、さゞれ石のいはほごなりて苔のむ

すまで繁昌して、孫子の末々までも、御榮え候やうにご、打願ひ参らせ候まゝ、筆に任せて申し参らせ候。

第一慈悲の心ありて人を憐み、蟲獸の上までも露の情を懸け給ひ、おもては唯青柳の絲の風に靡くが如く物やはらかにして、人の心を酌みしり、僻める心を押直し、御嗜みなさるべく候。さて又心の中は石や金よりも堅く、あだなる心を持ち給はぬ事肝要にて候。忠臣二君に仕へず、貞女両夫に見えず。ごあれば、此の理を朝夕心に懸け給ひ候はゞ、神や佛の御守もおはしますべく候。

第二、まれ人など御渡り候はん時、内に無念のここ候とも、其の氣色を露程も見せず、何ごなく打向ひ、春は青柳、梅、櫻、鶯

〔一〕忠臣不事二君。貞女不レ見二夫一。〔史記、田單傳〕

雲雀、夏は卯の花、菖蒲、橘、杜鵑、螢、秋は月、紅葉、霧、蟲、鹿、冬は雪、霜、霰、鶯、鴨、鷹、いづれも其の折に觸れたる物語なごして、懇に取りはやし給ふべく候。さりごて、年若き人の餘り睦まじげなるも、外目如何あるべき。唯何ごなくなぞらへて、ごかくしのぎなきやうに、愛々しく候はん事こそあらまほしく候へ。第三、召使ふ人の疎略にて、何事も思ふやうになく候とも、忍びやかによまひ言をもいひ聞かせ給ふべく候。それをも聞入れず候はゞ、責め誠めもあるべく候。さりごて、主なごの聞かせ給ふ所にては口惜しく候。如何にみめ姿うるはしき兒、女房なりとも、腹を立てたる顔は見にくきものにて候。しかも若き人、聲高に怒り候體、あさましく候。さて、

よまひ言をも聽くまじきものご思ひ給はゞ里へ返し候はば、さのみ苦勞もあるまじく候。男も女も、餘り短氣に候うては、難も出來、召使はれ候者も、よそへ悪しきやうに名を立て、後には逃げざるものにて候。

吉野なるなつみの川の川淀に

かもぞ鳴くなる山蔭にして

ご詠める歌の心は、吉野の川は早く候、鴨は水の上に住めども、餘り早き所には住み難く、川淀にて水の淀む所に遊ぶごなり。況や氣性烈しき主に使はるゝは苦しきものに候。第四、夫婦の間、高きも低きも、睦まじく候はん事こそ、よその聞えもよろしく、心にくうも侍らめ。たごひ幾千代を送

(一)湯原王の歌  
萬葉集卷三及  
び新古今集に  
出づ。

り給ふごも、聊かも主に見落されぬやうに、朝夕嗜み候はんには、いよく、千秋萬歳を保ち給ふべく候。さて無念の事をも、さのみ思ふべからず。たゞ世の有様をつらく、ご見て、心をものごやかに過し給ひ候はゞ、行く末好き事のみにてあるべく候。歌に、

事足らぬ世をな恨みそ鴨の足の

みじかくてこそ浮ぶ瀬もあれ

さて又心に掛けて習ふべきは筆の道にて候。いかなる位高き人中にても、おめずして、しごやかに書きなしたるは、いご氣高く見ゆるものに候。上にも下つ方にも無手に候はゞ、不自由なるのみかは、其の身も賤しく成りさがるもの

にて候。「われ人の用に立ちなんものは第一鳥の跡なり。」  
 或文にも見え候まゝ、常々御稽古あり度候。殊更和歌は家  
 のものなれば、申すに及ばず候へども、尋常ヒツコトに氣高く、四季に  
 應じて御詠みあるべく候。男も女も、よろづにつけて身持  
 心遣肝要に候。善きが上にも善きやうに願ひ参らせ候。  
 餘り山鳥の尾の長々しく書連ね参らせ候。猶重ね々  
 御祝の數々申し承り候べく候。めでたくかしこ。

一七 野村望東尼

佐々木信綱

望東尼は筑前福岡の人、文化三年浦野勝幸の三女として  
 生る。容うるはしく、歌をよくし、書に巧に、裁縫刺繡の業に

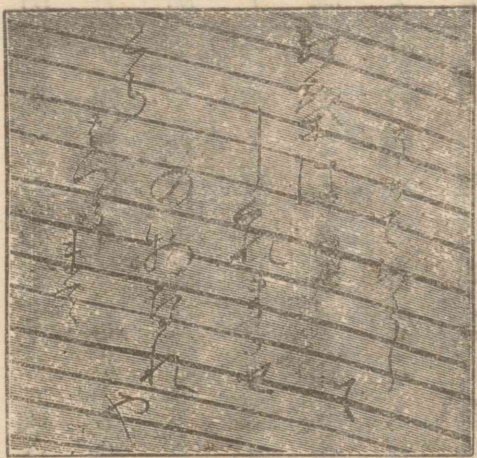
(一)名は忍向。京  
 都清水寺の住  
 僧。安政五年  
 (一五一八)十  
 一月西郷隆  
 盛と俱に海に  
 投じて死す。  
 年四十六。  
 (二)福岡藩士。勤  
 王を唱へて幕  
 吏に捕へられ、  
 元治元年(二  
 五二四)七月  
 刑せらる。年  
 四十三。或は  
 三十九。  
 (三)山口藩士。吉  
 田松陰の弟子。  
 慶應三年(二  
 五二七)病死。  
 年二十九。

もたけたりしが、同藩の士野村貞貫の詩歌に嗜深く、正義廉  
 直の士なるを聞きて、先妻の子三人あるをも厭はず、野村氏  
 に嫁ぎて、よく其の家を治め、先妻の子をおほし立て、一家和  
 合、春風の吹くが如くならしめぬ。後家を長男に譲りて、平  
 尾村の邊、靜かなる境に世を避けしに、安政の四年といふに、  
 夫世を去りしかば、剃髮して佛の道に入り、其の名も女を  
 望東尼と改めぬ。當時幕府の專横甚しく、時勢の日に非な  
 るを見るにつけても堪へ難く、密かに交を志士に結び、ある  
 は其の山莊を會合の所とし、あるは同志をかくまひなごし  
 て真心を盡しぬ。されば、彼の僧月照(一)が薩摩へ下りし時は  
 此處に宿し、又平野國臣(三)、高杉晋作等をも潜ましめ、其の危き

(一)三條實美。

を救ひてねもごろにいたはり、太宰府に幽閉せられし三條公に謁しなごしたり。かゝる事つもりしかば終に罪を得、捕はれて浪風荒き玄海灘の一孤島、陸地を距る五里沖なる姫島の牢獄に込められぬ。そこに在るここ二年。身を容るべきは、僅かに四疊の荒板敷、めぐりには松の檻木を組み、荒格子を構へて、海見ゆる南の方にのみ小さき窓ある牢の中に、かよわき老の身の押込められて、暑さ寒さを忍び居しに、彼の高杉晋作は其の舊誼に報ゆべく、同志を遣りて姫島の牢檻を破り、望東尼を奪ひて長門に隠せしかご、老軀長く堪ふることを得ず、維新の大業成るを見ずして、慶應三年十一月六日、年六十二歳にて病の爲に空しくなりぬ。女

もみち葉は時  
雨まかせの物  
なれや朽ちは  
つるまで染め  
てちらして



望東尼筆蹟

ながらも皇國のおん爲、大君のおん爲に心を碎き、あるは志士の病をさぶらひて慰め勵まし、あるは同志の間に入りて互に志を通ぜしめしなご、其の心づかひなみなみならず、誠に其の一家の良妻賢母なりしが如く、陰に維新の大業を扶けし烈婦の一人なりき。其の一生の閱歴かくの如く、さながら一篇の詩なり。しかも忠誠燃ゆるが如き真心を緯こし、感じ易き優しき女心を経こして、優れたる才をもて、此の間に織りなしつる歌文の錦、いかで世

の常なるべき。

彼が歌は、或は悲憤慷慨憂國の至情あふれて、句々皆血涙の跡をこむるあり。或は優麗閑雅、やさしき鶯の初聲を聞くが如きあり。しかも此の両面を相むかへ見て、始めて其のすぐれたる人となりを知り、其の歌のまことの趣をも解しつべく、猛く雄々しきが中にも、なよ竹のたわみながらに強きところあるを知り得べし。且や其の歌の調の清新なる、其の觀察の奇警なる、又よみざまの巧にして手のきゝたる、其の修辭に、用語に自由輕妙にして、其の師大隈言道さながらなるあり。もごより生具の天才ならんも、またよく師を學びて堂奥に達せしものにあらざらんや。以て其の修

(一)筑前の國福岡の歌人。文久年中大阪に出て、歌を教ふ。

養の淺からざりしを知りぬべし。而して其の歌の慷慨悲憤の一面は、これ彼が境遇性情より得來りし所にして、言道が和歌には見えざる所なり

——歌學論叢——

### 一八 修 養

村上專精

文學博士。東京帝國大學講師。

修養とは善の習慣を造る事である。惡の習慣は何人にも容易に出来るものであるが、善の習慣は容易に出来るものでない。喩へば、下劑の効能は忽ちに現れるが、滋養の爲の藥用は、其の効能を見るここが容易でない。牛乳やスープは滋養になるけれども、二日や三日これを飲んで其の効果を見ることは出来ない。修養も亦永久に繼續すべき事

で、一時的のものではない。人間萬事十年とは、吾輩平素の持論である。一藝一能と雖も、上手である。「うまい」といはれる迄に發達するには少くとも十年以上其の道の修業を積む事が肝要である。

佛敎家の間に、天然の彌勒なく、自然の釋迦なし。といふ諺がある。「彌勒も、釋迦も、自然に彼の地位に成られたのではない。多年一日の如く修養を續けた結果として、大菩薩に成り、佛陀に成られたのである。」といふ意味である。孔子曰く「吾十有五而志學、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲、不踰矩」と。これ十五歳よりして七十歳に至る迄、怠ることなく修業を繼續した孔子の自白で

ある。此に依つて之を觀るに、釋迦孔子の如き大聖人も、多年修業を怠らなかつた結果として、永く世界に仰がれるに至つたのである。まして吾人に於ては、絶えず修養を繼續するでなければ、勝れた人物たることの出來ない事はいふ迄もない事である。

然るに世人一般の通弊として、他人に何か勝れた長處があるのを見るに、率爾として之を評して、彼は才子である、幸運兒である。などと謂ふ者が多い。此の如きは、恰も、多年の辛苦に依つて成れる建築物を、一朝自然に成れる蜃氣樓と見ると相似たものと謂つてよからう。賴山陽といへば、誰も「彼は才子であつた。」この感想を惹起し、彼が勤勉に依つて

成功したもものなることを思ふ者は誠に少い。されど彼の傳記を観るに、此の如きは全く誤謬の感想である。彼は生れて僅かに八九歳の頃、早く己に古今の軍記物を讀んで、晝夜懈ること無く、時に寢食を忘れる事もあつた。適、眼病に罹り、父春水から讀書を禁ぜられたけれども、尙此を廢するに忍びなかつたこと書いてある。彼が晩年の大作は日本政記であるが、其の記事多く病中に成つたといふ。彼は病既に革るに遇ひ、我が死正に逼れり。と言ひつゝ、なほ眼鏡をかけ、手に政記を取り、刪補して止めなかつた。一日、俄に左右を顧み、我將に假寢せんことす。と云つて筆を闇き、眼鏡は未だ離さずして瞑したと書いてある。山陽の一生は勤勉を以

て終ること云つてよい。彼嘗て人に語つて、我を才子なりといふものは、未だ我を知る者に非ず。我を能く勤めたる者なりと言ふ者は、我を知る者なり。と云つたさうである。彼は多年の修養に依つて、自己の天才を喚起した人である。獨り山陽のみならず、何人も、達人、上手と云はれる程の人は、必ず多年一日の如く修養して、自己の天才を喚起した人に相違ない。

修養は、一旦其の天才を喚起すここに努めて後は、之を廢して可いといふ譯のものでない。終生を期して廢すること無きものが眞の修養である。若し中途にして其の修養を廢せんか、其の日よりして其の藝術も技能も退步するの



である。

見ればただ何の苦もなき水鳥の  
足にひまなきわがおもひかな

池沼の水面に浮かべる鴨は、何の苦も無いやうに見える。

されど近寄つてよく之を見れば、少しの暇も油断もなく、彼は足を用ひて浮かんで居る。人も亦其の如く、外見何の苦も無く出来る。このやうに見えても、其の人自身にあつては、常にひまなく其の道の爲に竭くす所あるに相違ない。天下の横綱も、一年も二年も遊んで居つて、然る後に相撲を取つて見たらごうであらう。天才の大畫家も、二三年間筆ご全く縁を斷つて後、また筆を執つて見たら如何であらう。

人間萬事休息すれば必ず退歩すべきものなることを忘れてはならぬ。随つて、修養は生命のあらん限り廢すべきものでない。多年一日の如く繼續すべきものである。

### 一九 木曾の木山

八波 則吉

<sup>(一)</sup> 木曾へ木曾へご皆行きたがる

木曾にや木山があればこそ

これは名高い木曾節の一つです。木曾は皆さん御存じの如く信州の山奥で、昔木曾義仲ご云ふ豪傑が生ひたつた處、木曾川を挟んだ山また山の山里です。さうして其の山ご云ふ山には、天下の名木檜の類が晝なほ暗く生ひ茂つて

第五高等學校  
教授。  
(一)長野縣西筑摩  
郡、木曾川沿  
岸一帯の稱。

ゐます。

木曾の名木檜に榎さくら

杜松かすに羅漢柏あひすに高野槇

これを木曾の五木と申して、五木の中の一本でも無断で伐つた者は、昔から打首になつたものだ。と言傳へられてゐる位です。明治神宮の御用材は、此の木曾の御料林から伐採して、森林鐵道で運んで、(一)上松あひまつと呼ぶ停車場から、汽車で東京に送られてゐます。私は先年の夏休、木曾に遊んで、上松停車場から所謂森林鐵道と云ふ珍しい汽車に乗つて、十二哩も山奥の山小屋に一泊して、親しく伐採の状況を實見しました。

(一)今、駒泉村と云ふ。駒ヶ嶽の西麓に在る

ですから、あの折に見た材木が、いづれ明治神宮のお鳥居ともなり、お柱ともなるのだと思ひますれば、嬉しいやうな懐かしいやうな、又有難いやうな勿體ないやうな氣が致します。

木曾の名所は棧かけ寢ね覺ざう

山で高いのが御嶽山(一)おんたけさん

御嶽山にこそ登りませんでした。が、木曾の名所の二つだけは見物しました。それ故、項を分けて旅行中の思出を面白く可笑しく書いて見ませう。

(一) 木曾のかけはし

木曾に登つて先づ驚いたのは文明の力でした。「木曾街

(一)長野縣西筑摩郡の西北境に在る。高さ九千八百四十尺。

(一)支那の四川省に在る險路。

道は日本第一の難所で、蜀の棧道にも比すべき程の所だ。昔話に聞いてゐました。ところが今では汽車が通じて、芭蕉翁が、

かけはしや命をからむ蔦葛

と詠んだ木曾のかけはしは、立派な吊橋に代つてゐます。命をからんで渡したと云ふ蔦葛の棧橋などが跡形もなく、ただ苔蒸した芭蕉翁の石碑が一基、崖の上に昔を語つて居るばかりです。

(二) 森林鐵道

中央線上松驛から分れて、小川の伐採地まで十二哩ある森林鐵道は、目下盛に運材を致してゐます。線路は河に沿

(一) 東京市麴町區飯田町より、山梨・長野・岐阜の三縣を経て名古屋に至る鐵道。

ひ谿を涉り、頗る難工事であつたらしく見えます。總豫算約五拾萬圓。最も急な個所は二十分の一の勾配と申して、二十間に一間ほごも高くなつて居るのです。それゆゑ普通の乗客は一切乗せません。上りは空車の機關車がほつほつと太息を吐いて上つて居ますが、下りは山なす木材を平氣の平左で運んで居ます。此の種の鐵道はまだ我が國には餘り多くは敷設されて無いこの事です。私は幸ひ技師に知人があつたので、此の汽車にも乗る事を得ました。

(三) 小谷狩

此の森林鐵道が出来るまで——徳川時代からつい近年まで——は、運材は總べて谿川の水を利用して、そろりそろりこ

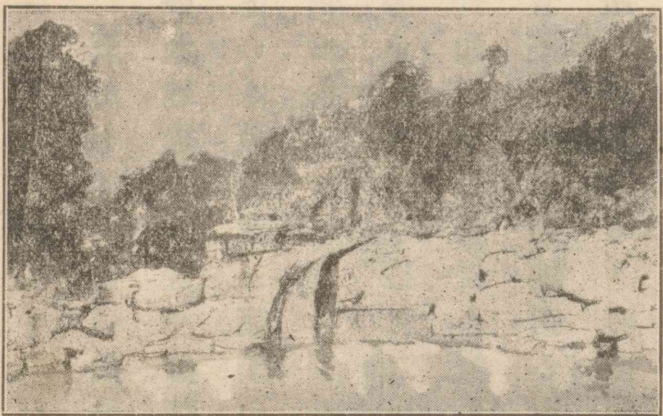
流したものださうです。之を小谷狩こたがかりと申します。谿川に木材で堰を作つて、水を溜めては、大勢の人夫がてんでに鳶口を持つて、エンヤラヤー、ヤツトコセーと、それはく、優長なものだつたさうです。而も一朝洪水でも出ようものなら幾萬本の木材が相撲ち相衝き、算を亂して木曾の本流さして落下するので、小谷狩の運賃は、木材一石につき、平時が三十錢乃至三十五錢もかゝり、流材その他の被害を受けた場合を見積れば、四十錢乃至四十五錢もかゝつたものださうです。所が森林鐵道に依る時は、驚く勿れ、一石の運賃僅かに十五錢。「流石は文明の利器！」と、私はこんな山奥で感心しました。木材一石と云ふのは、十立方尺即ち一尺角一

丈の方柱の事ださうです。

(四) 寢覺の床

上松を中心として、木曾の棧と殆ど同じ距離即ち約十町の下流に、名高い寢覺(一)の床が横たはつて居ます。臨川寺(二)の境内から瞰下すに、懸崖數十百丈、奇巖怪石が淵を圍んで、天下の名勝たるに恥ぢない絶景です。人毎に崖を傳ひ、氣息奄々として、床の邊に振寄り

(一)長野縣西筑摩郡、上松驛南十二町。  
(二)寢覺山と稱す、臨濟宗。



寢覺の床

立寄り見物します。

木曾の御嶽山は夏でも寒い

袴やりたや足袋添へて

夏でも寒い御嶽山の麓木曾の溪流一帯の地は避暑旅行の適地です。況や針葉樹の森は向上心を刺激すること夥しいものです。諸子の御出馬を望んで筆を擱きます。

## 二〇 樂 地

幸田露伴

文學博士。隨筆、小説に名著多し。

如何なる處にも樂しき地はあるべし。又如何なる處にも樂しからぬ地あるべし。花笑ひ、鳥歌ひ、天長閑に霞み、水緩やかに流るゝ春の日に當りて心、心よき事のみ懷に滿つべくはあらず。朝の曇には雨を疑ひ、夕の風には寒に怯ゆ

るここもある例なり。雪雲の日を障へて暗く、大地凍りて土に生色なく、人畜共に萎えかゝむ冬の時に當りても、うら悲しき事のみ胸を塞ぐといふにもあらず。或は水仙の一二輪に清き優しさを感じ、或は暮鴉の三四聲に寂びたる趣を覚え、木の根焚く山家の爐のほごりに罪なき話の興を涌かし、ぬく灰にたく焼芋の煖きに笑むをかしさもあるべし。金殿玉樓にも樂しからぬ折はあるべく、茅店草屋にも樂しき處はあるべし。

事物は大凡只一向ならぬものなれば、いさゝく樂しからぬが中にも、樂しき處、樂しむべき處もあるべければなり。樂しき處、樂しむべき處を見出し得れば、如何ほど窮苦不快

の中に在りても、人は自らに勇氣を得て、苦中の苦に堪へ忍び、やがて人中の人となり得るころもあるべし。さなきまでも、樂しからぬが中に、樂しき地を見出さんことを常に心がけて、其の習慣を身につくる時は、朝夕に心も潤く、氣もゆたかになりて、おのづから人品も宜しくなり、分別も正しくなり、世をば樂しく過すやうにもなるべし。樂地を見出すべし。努めて樂地を見出す習慣を身に賦せん、心がくべし。

昔或江州の行商人と他の國の行商人と、共に碓氷の坂路を登り行きける折、夏の日の烘るが如く熱きに、商ふ品の嵩高く重かりければ、二人とも憊れ苦しみて憩ひけるが、苦し

さの餘りに江州のならぬ商人、碓氷の山の今少し低くもあれかし。身すぎの道に苦しからぬは無けれど、かばかり高く峻しくては、行商を廢めて歸り去らん、こしも思ふなり。こ溜息つきて歎じけるに、江州の商人打笑ひて、坂も同じ坂なり、荷も同じ程なれば、御身の苦しむ程は我もまた苦しみて、かく息も喘ぎ、汗も流るゝなり。されども我はしかおもはず。此の碓氷の山を十程も重ねたる高き山もあれかし。さらば數多き行商人は、皆半途より身も憊れ、心も弱りて歸り去るべし。其の時、我一人如何にもして山の彼方に到り、思ふがまゝに商賣して見ん、こは思ふなり。碓氷の山の高からぬこそ口惜しけれ。こいひけりこそぞ。同じ苦難の中に

在りても、よく樂地を觀るものは、身は撓んで心撓まず、力衰へて勇衰へず。一路兩人、一境兩狀、よく／＼思ひ味ふべきなり。

## 二一 唐卒都婆に血つくる事

昔唐土に大なる山ありけり。その山の巔に大いなる卒都婆一つ立てりけり。その山の麓の里に、年八十ばかりなる嫗の住みけるが、日に一度、その山の峯にある卒都婆を必ず見けり。高く大いなる山なれば、麓より峯に登るほど、峻しく岨しく道遠かりけるを、雨降り、雪降り、風吹き、雷鳴り、しみこほりたるにも、又暑く苦しき夏も、一日も缺かず、必ず登

りてこの卒都婆を見けり。かくするを人得知らざりけるに、若き男ごも、童も、夏暑かりけるころ峯に登り、卒都婆の下に居つゝ涼みけるに、嫗汗を拭ひて、腰二重なるもの、杖にすがりて、卒都婆の下に來りて、卒都婆を廻りければ、拜み奉るかご見れば、卒都婆をうち廻りては、即ち返す／＼もするこそ一度にもあらず、數多度この涼む男ごもに見えにけり。この嫗は何の心ありて、かくは苦しきにするにかご怪しがりて、今日見えば、この事問はんといひ合せける程に、常のこごなれば、この嫗匍ふ／＼登りけり。男ごも嫗にいふやう、お嫗は何の心によりて、我等が涼みに來るだに、暑苦しく大事なる道を、涼まんと思ふによりて登り來るだにこそ

あれ、涼むこともなく、別にする事もなく、卒都婆を見廻るを事にて、日々登りおるこそ怪しき姫のわざなれ。この故知らせ給へ。と言ひければ、この姫若し主たちは實に怪しと思ふらん。かく詣で来てこの卒都婆見ることは、この頃の事にしも侍らず。物の心知り初めてより後この七十餘年、日毎にかく登りて、卒都婆を見奉るなり。といへば、その事の怪しく侍るなり。その故をのたまへ。と問へば、おのれが親は、百二十にてなん亡せ侍りにし。それに又父・祖父などは、二百餘年までぞ生きて侍りける。その人々の言置かれたりけるごとく、この卒都婆に血の附かん折になん、この山は崩れて深き海となるべき。となん父の申し置かれしが、麓に侍る

身なれば、山崩れなば、うち掩はれて死にもぞすると思へば、若し血附かば逃げて退かんごとく、かく日毎に見侍るなり。といへば、この聞く男どもをこがり嘲りて、恐ろしき事かな。崩れん時は告げ給へ。など笑ひけるをも、我を嘲りていふことも心得ずして、さらなり。いかでかは我一人逃げんと思ひて、告げ申さざるべき。といひて、歸り降りにけり。この男ども、この姫は今日はよも來じ。明日又來て見んに、威して走らせて笑はん。と言合せて、血をあやして卒都婆に能く塗りつけて、この男ども歸り降りて、里の者どもに、この麓なる姫の日毎に峯に登りて、卒都婆を見るが怪しさに問へば、云々なんいへば、明日おごして走らせんごとく、卒都婆に血を塗り



つるなり。さぞ崩るらんものや。など言ひ笑ふを、里の者ども聞き傳へて、をこなる事のためしに引き笑ひけり。かくて又その日に、姫登りて見るに、卒都婆に血の大らかにつきたりければ、姫うち見るまゝに色を違へて、仆れまろび走り歸りて叫び言ふやう、この里の人々、疾く逃げ退きて命を生きよ。この山は只今崩れて深き海となりなごす。ご普く告げ廻らして、家に行きて子孫ごもに家の具足ごもおほせ持たせて、おのれも持ちて手惑して里移りしぬ。これを見て血附けし男ごも、手打ちて笑ひなごする程に、その事ごもなく、さゝめき罵りあひたり。風の吹き來るか雷の鳴るかも思ひ怪しむ程に、空も暗闇になりて、あさましく恐

ろしげにて、この山搖ぎたちけり。こはいかにくご罵り合ひたる程に、唯崩れもてゆけば、姫は實しけるものをなご言ひて、逃げ得たる者もあれごも、親の行方も知らず、子をも失ひ、家の物の具も知らずなごして、をめき叫びあひたり。この姫一人ぞ子孫も引具して、家の物の具一つも失はずして、かねて逃げ退きて靜かに居たりける。かくてこの山皆崩れて、深き海となりければ、これを嘲り笑ひし者ごもは皆死にけり。あさましき事なりかし。——宇治拾遺物語——

二二 武藏野の夕

大類 伸

東京に生れ、東京に長じ、而して今も尙東京に生活しつゝ、

文學博士、東京帝國大學助教授、日本歴史を專攻す。

ある私は、暇に乗じては屢、武藏野を彷徨する。但し武藏野  
 と云つても主として東京の近郊であるから、半ば都會化し  
 て原野の佛は全く失はれて居る。併しそれでも大都市に  
 對する矛盾はそこに充分に認められるのである。  
 目覺しい花々しい眩しい大都市を外に出で、一日の行樂  
 を郊野に擅にした後、芒の穂先のみ白く薄れて見える夕靄  
 の田畑道を歸つて來ると、武藏野特有の雜木が彼方に一團、  
 此方に一叢黒ずんで見渡される。其の木立の間からは屢、  
 燈火の光が洩れて來る。云ふまでもなくそれは人家であ  
 る。既に都會化されつゝある武藏野は、其等の茅屋にも、も  
 はやランプ、行燈の類は認められないで電燈が燈るやうに

なつた。それほど開化したとは云へ一體の氣分は依然武  
 藏野たるを失はないで居る。

確かにそれは靜かな光景である。喧擾と燥急との都會  
 に對して、それは實に矛盾の極ではないか。何の音も聞え  
 ず、總てが夕靄に包まれた天地の間に、只一つボンヤリと明  
 るい農家の燈火は、都會裡に棲息する私達に取つては餘り  
 に靜か過ぎる。そこに人間が生きて居るのだらうか、そこ  
 に社會生活の流れが流れて居るのだらうか、少なくともそ  
 こに歴史が動いて居るのだらうか。若し歴史がナポレオ  
 ンや維納大會議やメツテルニヒヤ(一)バ(二)ーマス(三)トン等のみの  
 歴史であるならば、武藏野の一農家の夕は決して歴史の舞

(一) 奧太利の大宰  
相。外交家。  
一八五九年歿  
す。

(二) 英國の政治家

臺には上つて來ない。そこに住む人々は「歴史」の片隅を占めるには餘りに小さい、否餘りに靜かなのである。併し萬骨枯るゝとも兵士なくして戦争が出来ない如く、眠つた様な靜かな一農家も、大なる歴史の流れに何等かの貢献をして居るに相違ない。靜かな流れなくしては、山河もごよむ大瀑布もあり得ない。等しく、其等の農家なくしては、大なるもの<sup>(一)</sup>の存在も不可能であらう。

戦國の劣敗者たる北條方の武士が、寂しい武藏野に土着して農村の開拓に従事し、それが段々年代と共に發達を重ねて行つた。たゞ草創の當時土着や開拓が如何なる順序組織で行はれたか、判明でないのは残念であるが、それは已

(一)背景の土地の意。

(二)名は正武、徳川氏の臣、才智ありて能く獄を斷す。

(三)磐城白川城主、天明七年老中となり、幕政を改革して功あり。文化九年致仕して樂翁と稱し、文政十二年歿す。

(四)出羽山形の人、由井正雪に與して幕府の顛覆を圖る。慶安四年捕へられて殺さる。

むを得ない。たゞ北條氏が歿落して關八州が徳川氏の手<sup>(一)</sup>に歸し、江戸城下の繁榮が日に月に進んで行き、江戸時代史の上には泰平の花々しい色彩が益濃くなつて行くの時、嚮の劣敗者たる武士等は何うなつたのでらうか。又江戸城下のピンターランドたる武藏野が、草茫茫たる林野から、開拓された農村に化して行つた次第は、何うであつたらうか。其等は花々しい江戸時代の歴史からは忘れられてゐる。柳營の政治や、江戸・大阪の町人の活動の爲に、何處かに葬られて了つた。併し江戸時代史の貴重なる半面は、そこになければならぬと思ふ。

(二)阿部豊後守や松平伊豆守や丸橋忠彌や大石良雄や、乃至

(一)紀伊の人、後江戸に出て大富豪となる。享保十九年歿す、年六十六。

(一)紀國屋文左衛門の名が、江戸の歴史を飾つて居るの時、以上述べた如くにして、此の武藏野の一部落は靜かに開拓されつゝあつた。「小さき者」ながらそこには自然に對する不斷の闘争と順應とがあつた。其の大なる努力に依て「大江戸」のヒンターランドは作られた。それは實に我等の看過し難い一面である。所謂江戸時代史の「大なるもの」に對して「小さなもの」の代表者たるべき其の一つは、此の武藏野の一隅にあることを忘れてはならない。

### 二三 女子と文學

我が國の女子には和歌に秀でしもの、才學男子をして後

(一)天武天皇の妃。

(二)天武天皇の皇子大津皇子の妃。

(三)大伴家持の妻。

へに瞠若たらしめしもの、上古以來屢見る所なり。萬葉集の中にも、額田女王、石川(一)郎女、坂上(二)大郎女など巾幗者流の作品、また決して少しとせず。されど其の才媛淑女の彬々として輩出せるは、實に平安時代にして、文學は殆ど女流の獨占に歸し、男子は有るか無きかに、其の一隅にけおされぬ。其のかくの如くなりしは、基づく所一にして足らざるべし。雖も、女御更衣が、各其の威勢を張りて權力を争へるも、亦其の一主因たるべし。即ち才學ある女子は、擧つて其の招に應じて後宮に集れるなり。集りては互に才を競ひ、男子も亦これと唱和贈答せんことを求めければ、後宮はやがて文學の淵叢、女房はすなはち文界の粹となれり。かくて彩

華爛漫たる平安女流文學は生れ出でたるなり。  
 平安時代の女流文學者の中にて、最も著れしものを擧ぐれば、和歌には小野小町・和泉式部などあり。散文には紫式部・清少納言などあり。小野小町は女性美の最もよく發揮せられたる一人として、常に業平と對せしめらる。業平は天成の詩人にして、其の心に感ずる儘の歌となれるもの、風の河上を行きて、水おのづからに文をなすが如し。唯それ感情の走るにまかせて口に上せ、敢へて刻苦鍊磨をなさず、いはゆる心餘りて詞足らざる所あり。小町も亦業平の亞流にして、唯感情の儘に詠出す。其の詠の業平に比して、更に濃艶優麗なるもの多かりしは、さすがに女性の作なれば

なるべし。

和泉式部もまた才色雙絶・多情多恨、ものに拘束せられず。怨みては咽び、笑ひては鳴り、綿々滾々として盡きざる概あるもの、實に其の性情の迸り出でし所なり。其の詩才の豊富にして所作の多量なるは、蓋し小町の上に出づ。もしそれ、和歌の眞の價値を以てすれば、此の式部こそ業平と並べて、平安歌人中の二星といふべけれ。

源氏物語の著者は、人も知る如く紫式部なり。早く夫に後れて寡居せる時に、此の大著を成し遂げたるなり。性貞淑にして、節操の譽高く、其の德行は千載のもし、婦女の龜鑑とするに足るものありしを以て、其の詞想もまた放縱浮薄

なる當時の人情風俗を描寫しながら、何處ごもなく氣品高く、同情に富み、其の筆致も亦逸氣奔放の風なく、順良謹慎にして、長所に矜らざる趣あり。

清少納言に至りては、其の性情正に紫式部と相反し、機敏にして才情溢れ、屢人を驚かせり。其の著枕草子は、多く彼が遭遇せる事實の追憶、さらずば時々折々の見聞感想にして、秩序も無く、筆に任せて書連ねたるものなり。而して其の文を行るや、奔放にして自由、些の澁滯を見ず。偽らず、飾らず、眞率に彼が本來の面目を曝露し來りて、其の驕慢なる虚榮心の、隨處にほの見えたるもをかし。而も其の觀察は緻密周到を極め、言句は痛快警拔、寸鐵よく人を殺すが如き

ものあり。



紫式部

かくして、紫式部と清少納言とは、其の相反せる性情と著作ごによりて、平安時代の文學を飾れるなり。其の他、赤染衛門、伊勢大輔等も、亦此の時代にありて名を知られたる才媛なり。降りて鎌倉時代に入りては、和歌に式子内親王、宮内卿あり。散文に阿佛尼あり。式子内親王は後白河天皇の皇女にして、當時和歌を以て著れし、<sup>(一)</sup>雅家

(一)從三位。中納言藤原雅孝の男。

(一)從三位。刑部卿藤原重家の男。  
(二)正二位大納言。土御門内大臣源通親の男。  
(三)從二位。中納言藤原光隆の男。

(四)家康に仕へ、秀忠の女千姫の秀頼に嫁するや従つて大阪城に入り、淀君の信任を得き。

有家・通具・家隆等も及ばざる所ありきといふ。されど此の時代を代表せる女流は阿佛尼なり。阿佛尼は藤原爲家の室。其の著十六夜日記の文、詞短くして意長く、平易にして高雅なり。其の地勢形勝を叙して簡明なる間に、處々旅情をのべ、怨恨の念を洩し、子を思ふ親の心を寫せるうちに、一種の趣味を味はふことを得べし。

これより室町時代以後に至りては、女子はいたく卑下せられ、武人ひこり天下に跋扈する情態となれり。さればまた平安時代の如き才媛の輩出するを見ること能はず。唯戦亂の世にありて、小野お通(四)の博學にして文をよくし、十二段草子を作れりといへるは珍し。徳川氏天下を一統して

(一)伊勢の神官荒木田武遇の養女。慶徳三郎大夫の妻。文化三年(二四六六)歿。年七十五。

花まちし春にかへすや郭公麗

(二)水鏡、大鏡、増鏡。

文教を奨励するに至りても、女流文學者にして遠く中古の盛に比すべき者を見ず。中につきて加賀の千代の俳句に於ける、荒木田麗女の歴史に於ける、やゝ見るべきあるのみなり。千代女の「ほこゝぎすほこゝぎすこてあけにけり」の



荒木田麗女筆蹟

句は、人のよく知る所なり。荒木田麗女の月の行方、池の藻屑は三鏡(二)の後を續ぎ、以て慶長の頃に至るまでの歴史を述べ。我が國女流の歴史家として、人の推奨する所なり。我が國の女流文學は、かくの如くにして明治聖代の文化

に入ることを得たり。王政の維新と共に、女子教育日に月に隆盛に赴き、また昔日の比に非ず。將來社會文化の進むにつれて、男子は研究發明に心を潜め、生存競争に力を盡すべし。此の時に當りて、女子たるもの亦我が固有の文學を研鑽し、以て文學史上に光彩を添ふる覺悟なかるべからず。

——藤岡作太郎著國文學史講話による——

### 二四 顯家卿の北の方

先帝の御時、源中納言みちのくの軍をあまた從へ給ひ、道道を平げて美濃の國までおはしけるよし、さきだちて聞えければ、上よりはじめて、たのもしき事におぼし給ひけるに、

(一)後醍醐天皇。  
(二)源顯家。親房の長子。

(一)延元三年五月、和泉國泉北郡石津に戦死す。年二十一。誤りて攝津阿部野と傳ふ。阿部野は東成郡、大阪市の郊外。

阿部野の露と消えさせ給ひけり、刑部丞ともなりが、其のきはの有様を、参りて泣くく、語るに、燈火の消えぬるやうになん、人々の心はなりにける。御父の卿はいかばかりおぼすにか、

先立ちし心もよしやなか／＼に

うき世の事を思ひわすれて

北の御方はたゞ伏ししづませ給ひて、さらに御心ちも無かりけるを、さわぎて面に水なごそ、ぎしほごに、またの日の夕暮のほごに、すこし御こゝちの出でさせ給ひて、

玉の緒のたえもはてなでくり返し

おなじうき世にむすぼほるらん



(一)河内國南河内郡川上村。

なほおなじ道にごおぼしたち給へる御氣色のいちじろく侍りければ、立去り給はで人々のまもりければ、御心にもまかせ給はで、<sup>(一)</sup>觀心寺といふ山寺にて、御ぐしおろして住ませ給へるに、

そむきてもなほ忘れぬ面かけは

うき世の外のものにやあるらん

こゝに三年が程過し給ひて、世のさわぎもしばししづまりければ、さすが故郷の方や思ひ出でさせ給ひけん、よしの山をたどり出でさせ給ふとて、

いづくにか心こゝめんみよし野の

よし野の山をいでてゆく身は

親房卿の御許に、しばしは

おはしまして、暁がたに立出

でさせ給ひけるに、御名残の

つきさせ給ふまじき御事に

てありければ、かへり見させ

給へるに、有明の月いささや

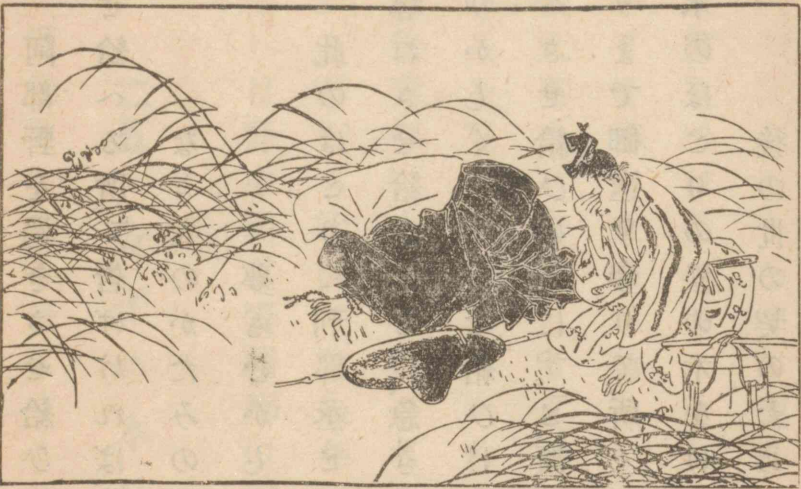
かに山の端近く見えければ、

別るれごあひもおもはぬ

み吉野の

みねにさやけき

ありあけの月



顯家卿の北の方(前賢故實に據る)

阿部野を過ぎさせ給ひけるに、「こゝなん其の人の消えさせ給へる所。」と告げければ、草の上にたふれふさせ給ひて、

なき人のかたみの野への草枕

夢もむかしの袖のしら露

此のほごりに刑部丞ともなりが世を背きてありけるを尋ねさせ給ひけるに、急ぎ参りて、御有様を見奉るに、さしもゆかしくわたらせ給ひける御よそほひの、いつしか變り衰へさせ給ひけるにや。」と、涙こゝめあへて、住吉天王寺のほごりまで御送り参りて、所々あないしけるに、天王寺の龜井の水のほごりの松の木をけづらせて、

後の世の契のために遺しけり

むすぶ龜井の水ぐきのあこ

と書きつけ給へり。それより、ごもなり入道は歸りにけり。一とせ尋ね來りて語りけるに、いごあはれに思ひ奉りて、其後天王寺へ参りけるに、御筆の跡の消えも果てずして残りけるを見参らせて、そゝろに袖をしぼりにけるにこそ。其の後舊都に上らせ給ひて、母君も共に世を背きおはしけるが、さきだち給ひて、又の年の春失せさせ給ひけるこそ聞えし。日野中納言資朝卿の御女なりき。

吉野拾遺

### 二五 女子の本分

吉田 静 致

男女其の分を異にするは人道の大法なり。思ふに男女

文學博士  
東京高等師範  
學校教授

は體質・性情を異にし、女子の長所は男子の短所にして、男子の長所は女子の短所なり。故に、男子獨りにては完全ならず、必ず女子の補助を要し、又女子獨りのみにては其の生を完うする能はず、必ず男子の保護を要す。社會も又兩者の一體となり、長短相補ふに依りて、其の組織を鞏固にし、其の發達を遂ぐるを得るものなり。されば女子は男子と異なる方面に於て、世に盡すべき幾多の本分あるを知らざるべからず。

男女の長短相補ひて、合同生活をなす中心は家庭なり。家庭は二つの主なる任務を有す。一は職業に従事して一家の自立を完うすること、一は能く内部を整理して健全な

らしめ、以て國家・社會の基礎を固うすること是れなり。而して、前者は主として男子の負擔すべき任務にして、後者は主として女子の盡すべき本分なり。換言すれば、女子は家庭を通じて國家に盡すべきものなり。世には男子の勇敢なる活動を偉なりとし、女子の溫柔なる行動を卑しとし、歐米の皮相を學びて、女子の自由解放を主張するものなきにあらず。固より男女は人格としては同一なり。されど、各其の天分の長所に依りて、家庭と國家とに貢獻すべきものなるを以て、決して、兩性の間に、尊卑・高下の別あることなく、従つて、我が國古來の婦道に於て否認すべきものあることなし。固より、文明の進歩と社會の發達とに伴ひ、舊來の陋

習は、之を打破せざるべからず。雖も、徒らに變化を喜びて、天地の公道に基づく我が國固有の美風をも傷はんとするは誤なり。家庭の整理は、主に妻として、媼として、主婦として、又母としての務を完うするに依りて成就す。即ち妻として、貞淑従順を以て夫に事へ、婦言を慎み、婦容を修め、婦徳を積み、又媼として、舅姑に事へて孝順に、夫の兄弟姉妹に對するに實の兄弟姉妹に對するが如くし、夫の親族に親み、家風を尊重し、一家春風の源たらざるべからず。更に主婦として、勤勞を厭はず、困難を避けず、能く家長を助けて、婦功を擧げ、家族

と和し、召使を憫み、一家經濟の主任となり、入るを計りて出づるを制し、以て家政を整理し、家運長久の計を立てざるべからず。而して、母となりては、一身を修養して、自から子女の模範となり、慈愛に溺れず、嚴酷に失せず、常に子女の將來を考へて、善良健全なる人物たらしめざるべからず。最後に老いて姑たるの時、機來らば、媼を見ること尙眞の子の如くし、同情を以て之に接すべし。實にかくの如く、良妻賢母たるの實を擧げ、家庭の女王となりて、能く之を整理するは、女子最大の本分なるべし。女子たるもの、能くこの重大なる本分を完うせんには、必ずや修養を積み、知識を磨き、徳行を修めざるべからず。往

昔にありては、無學なる女子も、尙家庭の經營に苦む所なかりし。雖も、今や世界の競争益、激甚となり、人々の業務は愈繁劇を加ふるに至り、安逸を貪る者は、到底生存を全うする能はざる有様となれり。従つて家庭の整理につきても、新しき知識と高尚なる品性を有する者にあらざれば、十分其の任に堪ふる能はず。現代の女子たる者深く考慮せざるべからざるなり。

實業補習學校 女子新讀本 後期用下卷附録

口語法 (文章篇)

單語が幾つか結合して一つのまごまつた意味をあらはすものを文と名づける。たとへば

私ごもは二年生です。

は單語が集つて一つのまごまつた意味をあらはしてゐるから文である。こゝに注意しなくてはならぬことは、このまごまつた意味をあらはすといふことである。この要件が缺けて居れば、單語がいに多く集つても、それは文と名

づけることは出来ないのである。  
 よい天氣 降る雨  
 等は單語の集りではあるが、「よい天氣」がどうだといふのか、「降る雨」がどうなつたのか、はつきりした意味をあらはしてゐない。従つてこれは文ではない。之を若し  
 今日はいよい天氣です。  
 雨が降る。  
 ごすれば、それぞれまごまつた意味をあらはすことゝなり、立派な文となるのである。

一 文の成分

文には必ず主題となる部分と、その主題について述べる部分とがある。例へば  
 花が咲いた。 風が吹く。  
 に於て、花・風はそれぞれその文の主題となつて居り、咲いた・吹くはその主題がどうであるかを述べた部分である。この主題となる部分を主語と名づけ、主題について述べる部分を述語と名づける。  
 いやしくも、まごまつた意味をあらはすには、主語と述語とは缺くべからざる要素である。故にこの二を文の主要成分と名づける。  
 主語と述語とは文の主要成分ではあるが、そればかりで

はまごまつた意味をあらはし得ないことがある。例へば

私は読む。 彼がくれた。 私は行く。

等に於て、私・彼は主語であり、読む・くれた・行くは述語であるが、これだけでは何を讀むのか、何をくれたのか、何處へ行くのか、はつきりしない。そこで

私は本を讀む。 彼がペンをくれた。 私は學校へ行く。

の如く本・ペン・學校等の語を補へばはつきりしてくる。このやうに主語述語のみでは意味のはつきりしない場合に加へられる語を補語と名づける。

次に左の文をそれぞれ比べてみると、

(1) 私は本を讀む。

(2) 私は面白い本を讀む。

(1) 彼は喜んだ。

(2) 彼はたいへん喜んだ。

(1) 雨が降る。

(2) ひどい雨が降る。

(1)の文はそれぞれまごまつた意味をあらはしては居るが、(2)の文に比べてみれば、(2)の文の方が一層はつきりした意味をあらはして居る。それは何故かといふに、(2)の文では主語・述語・補語の上に意味を委しくあらはす他の語が加

はつたからである。かくの如く文の主語・述語或は補語について、その意味を一層委しくあらはす語を修飾語と名づける。複雑な意味をあらはす文は幾つかの修飾語をこるのを常とする。



## 二 文の成分の位置

文の成文の位置は大體次のやうに言へる。

(1) 主語は述語の上におく。

月(主)が照る(述)。

花(主)が咲く(述)。

(2) 補語を要する場合には、之を主語と述語との間におく。

子供(主)が犬(補)を追ふ(述)。

私(主)は東京(補)へ行く(述)。

(3) 修飾語は修飾せられる部分の上におく。

花の色(修)はたいへん美しい。

にぎやかな町である。

右は普通の場合に於ける成分の順序であるが、この順序が故意におきかへられることがある。之を倒置といふ。



(1) 述語を主語の上におく場合。

知らないのか君は。

行きます私も。

(2) 補語を主語の上におく場合。

何を君は考へてゐるのか。

それを、ごここから君はこつて来たか。

(3) 補語を述語の下におく場合。

早く語り給へその話を。

もう行け學校へ。

### 三 文の成分の省略

文の成分は時によつて省略せられることがある。

(1) 主語の省略せられる場合

(僕は)君の爲を思へばこそ忠告するのだ。

(君は)これを知つてゐるのかね。

(君等は)話をしてはならぬ。

(2) 述語の省略せられる場合。

さあ、君どうぞこちらへ(來給へ)

僕は行かないつもりだ。君は。(行くか。)

(3) 補語の省略せられる場合。

僕にも(それを)下さい。

八時までに(私の家へ)來なさい。

知つてゐるなら(僕に)話し給へ。

#### 四 文の種類

主語と述語との關係が唯一回成立つた文を單文と名づける。

もう春が來た。

櫻の花が咲く。

右にあげたのは單文であるが、單文は何時もこんなに短いものばかりとは限つてゐない。

四十餘でなくなつた父は、家の爲に竭し、子の爲に竭し、郷黨の爲に竭して、その一生を終へられた。

の如きは可なり長いが、その主語と述語との關係が唯一回

しか成立つてゐないから、やはり單文である。

單文は他の文の中に含まれてゐることがある。例へば

休暇が來たので皆大喜びだ。

兄は軍人となり弟は學者となつた。

の中で「休暇が來た。」兄は軍人となり。は共に主語・述語の關係が一回成立してゐるが如きは是である。かく單文がその

獨立を失つて他の文の一部となれば之を句と呼ぶのである。而して「休暇が來たので。」の如く、下の文に従屬してをる

句を従屬句といひ、兄は軍人となり。の如く下の文と對立して居る句を對立句といふのである。

若し文の中にこれらの句を含めば、主語と述語との關係

が二回以上成立することになるから、それはもはや單文とは言へぬ。即ち從屬句を含んだ文であれば、それは複文であり、對立句を含んだ文であれば重文と言ふのである。前にあげた、休暇が來たので皆大喜びだ。は複文であり、兄は軍人となり弟は學者となつた。は重文である。

以上述べたのは文の構成上からの分類であるが、之はまたその性質の上からも分類が出来る。

(1) 説述文 述者がある事柄を、自己の意志で判断したり、推量したり、或は感歎したりする文を説述文と名づける。

これが有名な湊川神社だ。

彼は明日やつて來るだらう。

あゝ悲惨な死に様であるな。

(2) 寫述文 事實をありのままに述べて、別に述者の意志を加へない文を寫述文と名づける。

雨が降る。

音楽室からピアノの音がもれてくる。

日が輝いて居る。

(3) 疑問文 疑をあらはす文を疑問文と名づける。

そんな簡単なことを知らないのか。

あの人に會つたことがあるか。

(4) 希求文 命令・希望・禁止等の意味をあらはす文を希求

文と名づける。

早く来い。

これを教へて下さい。

煙を吸ふな。

...

...

文の種類

構成上の種類

單文

複文

重文

説述文

寫述文

疑問文

希求文

性質上の種類

仁井岡女子

大正十三年四月十五日印刷  
大正十三年四月二十日發行

不許複製  
實業補習學校  
女子新讀本  
後期用下卷

編輯者

斯波六郎

編輯者

野澤正浩

發行兼印刷者

丸岡才吉

東京市神田區通神保町五番地

印刷所

博文館印刷所

東京市小石川區久堅町百〇八番地

發行所

東京市神田區通神保町五  
番地  
振替東京六七一〇一

廣陵社

電話特長神田三〇五九番

女子新讀本  
定價六拾錢

広島大学図書

2000026461

